

黒島林第5・6号墳調査報告

香川県観音寺市母神山所在の後期古墳の調査

事務局用

1977年5月

黒島林古墳群発掘調査団

序

観音寺市の母神山一帯は、古墳時代後期の円墳數十基を中心に大型円墳、前方後円墳などからなる古墳群が形成されています。まさに、一帯は古墳文化展開の一つの大きな拠点ともいべきところでしょう。

この母神山の北西部は、池之尻町にある黒島神社の所有林であったところから一般に黒島林と呼ばれています。ここに円墳12基によって形成される古墳群が所在し、母神山古墳群の一支群をなしております。

今般の調査は、この黒島林古墳群の第5号、6号墳を対象としまして、昭和49年9月から11月にかけて、大西久吉氏を団長とする黒島林古墳群発掘調査団の献身的なご努力と、地権者であり造成工事者であります合田不動産の物心両面にわたるご協力によって実施されました。

今、ここにその調査結果がまとめられましたが、本調査報告書が一般の方々にも広く活用され、本市の文化財に対する理解と愛護に役立つことを祈っております。

なお、この黒島林第5号、6号墳の調査を担当された各調査員をはじめ、調査にあたり格別のご尽力を賜りました関係者の皆様方に心より厚くお礼を申しあげます。

昭和 52 年 5 月

観音寺市教育委員会

教育長 大西 利雄

例 言

1. 本書は、香川県觀音寺市池之尻町の母神山北西麓において、株式会社合田不動産（觀音寺市池之尻町 531、代表取締役 合田弘視）が行う母神団地造成工事計画地内に所在する黒島林第 5 号、6 号墳の調査報告書である。
2. 調査の実施に際しては黒島林古墳群発掘調査団（団長 大西久吉）が編成され、会社との間に母神団地造成工事に伴う埋蔵文化財包蔵地（第 5 号、6 号墳）発掘調査委託契約が締結された。
3. 調査の期間は、昭和49年 9月 12日～11月 20日である。
4. 調査は、香川県教育委員会文化行政課文化財調査係長 松本豊胤・香川県立高瀬高等学校教諭 石川 嶽の両氏の指導のもと秋山 忠・松本敏三が主として担当したほか、矢野道雄・加藤高章の補助を得た。
5. 遺構・遺物の実測は秋山 忠・松本敏三が担当したが、写真撮影は松本敏三、整図は井上れい子・嘉木富貴子・横田佳代子・秋山 忠が分担した。
6. 遺物の復元整理・実測及び整図においては香川県教育委員会文化行政課技師 渡部明夫から、多大の協力を受けた。
7. 本書の執筆・編集は秋山 忠・渡部明夫が担当した。
I、調査の経過……………秋山 忠
II、周辺の遺跡と古墳の位置……渡部明夫
III、調査の記録……………秋山 忠
IV、第 5 号・6 号墳の石室について ……渡部明夫
V、おわりに……………渡部明夫

黒島林古墳群発掘調査団名簿

團長	香川県文化財保護協会観音寺支部長	大西久吉
副團長	株式会社合田不動産観音寺営業所長 <small>代表取締役</small>	合田弘規
調査委員	香川県文化財保護協会員	
	"	近藤寿夫
	"	船場久勝
		三野貫一
調査指導	香川県教育委員会文化行政課文化財調査係 香川県立高瀬高等学校教諭	松本豊胤
調査員	香川県教育委員会文化行政課文化財調査係 " 観音寺市教育委員会社会教育課 大川郡長尾町造田	石川巖 秋山忠 松本敏三 矢野道大 加藤高章
事務局	株式会社合田不動産観音寺営業所 観音寺市教育委員会社会教育課	藤森茂司郎 二宮嘉幸

本文目次

I、調査の経過.....	9
1. 調査に至る経緯.....	9
2. 調査日誌抄.....	9
3. 調査後の措置.....	13
II、遺跡の位置と環境.....	15
III、調査の記録.....	21
1. 黒島林第5号墳.....	21
(1) 墳丘.....	21
(2) 石室.....	24
(3) 出土遺物.....	30
2. 黒島林第6号墳.....	41
(1) 墳丘.....	41
(2) 石室.....	44
(3) 出土遺物.....	52
IV 第5号・6号墳の石室について.....	74
V、おわりに.....	77

挿図目次

第1図 母神山周辺の遺跡	14	(2) Sトレントンチ西壁	43
第2図 母神山古墳群分布図	17	(3) Nトレントンチ東壁	43
第3図 肥鳥林第5・6号墳地形測量図	19	第13図 6号墳石室上面図	47
第4図 5号墳埴丘断面図	22	第14図 6号墳石室実測図	49
(1) Eトレントンチ北壁	22	第15図 6号墳石室床面プラン	51
(2) Wトレントンチ南壁	22	第16図 6号墳石室横断面図	53
(3) Sトレントンチ西壁	22	(1) 玄室	53
(4) Nトレントンチ東壁	22	(2) 玄門	53
第5図 5号墳石室実測図	27	(3) 美道	53
第6図 5号墳石室横断面図	29	(4) 美道	53
(1) 玄室	29	第17図 6号墳出土須恵器(1)	57
(2) 美道	29	第18図 6号墳出土須恵器(2)・土師器	58
(3) 美道	29	第19図 6号墳出土須恵器(3)	59
第7図 5号墳出土須恵器(1)	34	第20図 6号墳出土鉢器(1)	64
第8図 5号墳出土須恵器(2)	35	第21図 6号墳出土鉢器(2)	65
第9図 5号墳出土須恵器(3)	36	第22図 6号墳出土鍔錐車	66
第10図 5号墳出土須恵器(4)・土師器	37	第23図 6号墳出土馬具等	67
第11図 5号墳出土耳環・玉類	41	第24図 6号墳出土耳環・玉類	71
第12図 6号墳埴丘断面図	43		
(1) Eトレントンチ北壁	43		

図版目次

図版1 (1) 5号墳埴丘(南より)	80	図版8 (1) 6号墳石室(東より)	87
(2) 5号墳石室(南西轟道より)	80	(2) 6号墳石室・美道部	87
図版2 (1) 5号墳石室(東より)	81	図版9 (1) 6号墳石室・美道部	88
(2) 5号墳玄室竪掘坑(北より)	81	(2) 6号墳石室・玄門部	88
図版3 5号墳出土遺物(1)	82	図版10 6号墳出土遺物(1)	89
図版4 5号墳出土遺物(2)	83	図版11 6号墳出土遺物(2)	90
図版5 5号墳出土遺物(3)	84	図版12 6号墳出土遺物(3)	91
図版6 5号墳出土遺物(4)	85	図版13 6号墳出土遺物(4)	92
図版7 (1) 6号墳埴丘(南より)	86	図版14 6号墳出土遺物(5)	93
(2) 6号墳石室(南西轟道より)	86	図版15 6号墳出土遺物(6)	94

I. 調査の経過

1. 調査に至る経緯

昭和41年簡易保険加入者ホーム観音寺荘の建設工事の際、母神山頂部より北西麓の三谷上池に向って下る尾根上に3基の古墳が発見され、緊急調査が実施された。そのうち、石室の型式や遺物の明確であった第1号墳は東隣尾根の中腹に移転復元され、第3号墳は墳丘の一部を削り取られ、ホーム敷地の南側境界に近い法面に辛うじて残った。

これより以後、第3号墳の約30m上方で第4号墳が、西隣尾根に第5～8号墳が、西端尾根の先端部に第9～12号墳が確認された。いずれも径14～15mの円墳で、隣接尾根毎に4基づつのまとまりを見る。一帯は観音寺市池之尻町山越の地にあたり、現在株式会社合田不動産の所有管理下にあるが、かつて同町にある黒島神社の所有林であったことから黒島林と俗称されている。

さて、昭和49年7月合田不動産より観音寺市教育委員会あて、母神団地造成工事に伴う埋蔵文化財の現状変更申請があった。該当埋蔵文化財は、黒島林第5号・6号墳である。このため、県教育委員会及び観音寺市教育委員会の担当者が現地に出向し、合田不動産から当該事業計画について説明を受けるとともに第5号・6号墳の現状を確認した。これに基づいて、観音寺市文化財保護委員会は、両古墳の現状変更について合田不動産との協議を重ねたが、現状保存は困難であるとの判断を得て、県教育委員会指導のもとに緊急発掘調査を実施する意向を固めた。しかし、盜掘跡が歴然として石室が破壊されている第5号墳はともかくとして、第6号墳については、なお保存措置について考慮すべきことを強調した。

その後、観音寺市文化財保護委員会と合田不動産の意見調整ができる、合田不動産は調査経費の負担について全面的な協力を約し、調査実施のための具体的な計画が進んだ。

ここに、香川県文化財保護協会観音寺支部を主体とした黒島林古墳群発掘調査団が組織され、昭和49年9月9日には調査に先立って、遺跡の現状、調査の方法や工程等についての周知会をもった。そして、9月12日調査団は合田不動産との間に発掘調査委託契約をとりかわして調査に着手した。

2 調査日誌抄

調査は、9月中ほぼ予定通りの進行であったが、10月に入つて雨天の日が多く、たびたび作業の中断も止むなく、予定を過ぎて11月20日に終了した。ただ、5・6号墳が近接しているため都合によってはどちらかで作業し、また作業を併行するなど、調査の後半にはかなり能率的に作業を進め得たと言えようか。調査の実日数は48日である。

以下、調査の経過を調査日誌より抄出する。

月日(天候)	記
9・12木 (晴)	調査に着手。5・6号墳の埴丘及び周辺部の灌木、下草刈取り。とともに墳頂部に盗掘坑が残る。各々の地形測量、トレンチのポイントを設定する。
9・13金 (晴のち曇) 時雨	5号墳にて作業。縦横断トレンチを区画し、S・Nトレンチの掘り下げにかかる。午後降雨にて一時作業中断。
9・14土 (晴のち曇)	5号墳にて作業。Sトレンチで地山形態による溝状部を検出。Nトレンチでは約2m掘り下げるも溝状部は不明。主体部Wトレンチの掘り下げにかかる。
9・16月 (曇)	5号墳にて作業。埴丘及び周辺部の地形測量にとりかかる。Sトレンチの墳裾溝状部に入頭大の河原石があり、近辺にて須恵器・土師器片数点が出土した。Nトレンチでは溝状部様層序を認める。
9・17火 (曇のち晴)	5号墳にて作業。玄室部の排土を進め、残存側壁3石が出る。Sトレンチを埴丘基底面まで掘り下げて、版築状況を見る。Nトレンチの掘り下げ続行。
9・18水 (曇-時雨)	5号墳にて作業。玄室内の排水を行。Sトレンチで瓦砾部と側壁裏込め用をなすとみられる帶状の灰褐色粘質土層を認める。Nトレンチを埴丘基底面まで掘り下げる。
9・19木 (晴)	5号墳にて作業。Wトレンチで義造部の数石が露われたが、その在り方をつかむため南側に巾1m拡張した区域を設けて掘り下げにかかる。Eトレンチで溝状部を予想して2m延長、掘り下げる。
9・20金 (晴)	5号墳にて作業。Wトレンチの掘り下げ、玄室中点より8m地点周辺にて高砂脚部・壺口縁部など須恵器片20数点が出土。南側拡張区で内側と硬軟で区別できるたたき固めた片状部が出る。Eトレンチを埴丘基底面まで掘り下げる。表土下約50cm、巾1.1mの溝状部を検出する。
9・21土 (陰)	5号墳にて作業。Wトレンチの主軸線で柱を残し義造部掘り下げを続行。両側は盛上をたたき固めたような表面状となる。窓道最前部あたりで小形の須恵器完形品が出土。Eトレンチの奥壁後方部で墓塚掘り方とその内側部に約70cm高、約25cm厚の裏込めようと思われる灰白色粘質土層を認める。奥壁は大形一枚岩で約20cmの埋設と見られる。Nトレンチで溝状部様層序の外側に小盛土部を認め、2mトレンチを延長する。
9・24火 (小雨のち晴)	一昨夜来の降雨にて5号墳発掘区はぬかるみ状態、所々に水溜りがあり排水作業にあたる。このため、6号墳の発掘作業に着手。巾1mの縦横断トレンチを設定し、E・Sトレンチの掘り下げにかかる。
9・25水 (曇のち晴)	5号墳の乾き不十分。6号墳にて作業。Eトレンチを2mほど延長して表土下55cm、巾80~90cmの溝状部を、またSトレンチでも表上下95cm、巾70~80cmの溝状部を検出した。N・Wトレンチを掘り下げる。
9・26木 (晴のち曇)	6号墳にて作業。E・Sトレンチを埴丘基底面まで掘り下げて版築層を見る。Wトレンチで義造部にあたるところの北側にたたき固めたような片状部が出る。これに対応するものを南側にも想定して、新たに巾1mのトレンチ区域を設ける。Nトレンチ、玄室部の掘り下げ。
9・28土 (晴)	6号墳にて玄室部の掘り下げ作業。玄室部の範囲で軟質埋土、これは盗掘後の堆積によるためか。現墳頂より1.5mほど掘り下げて、中央南側に80×70×50cm大の砂岩が露われる。この1石は玄室方位に相応して横長に位置し、残存側壁かと思われたが、埋土中にあって不安定、転石とみた。なお、この間遺物の検出はなかった。

月日(天候)	
9・30月 (晴のち曇)	5号墳で主体部の掘り下げ。玄室で攢乱された砂利の一部が出る。玄門部で土層觀察用の畦を残し、70cmほど築道部を掘り下げる。6号墳でも主体部の掘り下げ。玄室部は約2.5m巾のコ字形で壁面が出来たが、主軸線より南西寄りの方位をなす。このため新たに主軸線、西側トレノチの設定が必要となる。
10・1火 (晴のち曇・雨)	5号墳にて作業。玄室床面の砂利を検出するが、搔き寄せられたような状態である。築道部の掘り下げにて須恵器片多数出土。午後2時過ぎ急に強い降雨となり、作業打切り。
10・4金 (晴のち曇)	5・6号墳とともに各所に水溜り、排水にあたる。5号墳SW地区で6.5×3mのトレンチを掘開、谷斜面に向う溝状部を検出、近辺で須恵器片20数点が出土。
10・5土 (晴)	5号墳にて作業。玄門部の敷石を検出、閉塞施設の遺存か。SW区トレチを地山整形面で整える。
10・7月 (晴のち曇)	5号墳築道部の掘り下げで小形の河原石数石が出る。6号墳では玄室部の掘り下げ続行、約30cm下部で2.3×1.6mほどの方形状に側壁が認められる。新たに設けた巾1mの西側トレチの表土削り取る。
10・9水 (曇のち雨)	6号墳にて作業。ほぼ主体部の在り方を把握し、新たに主軸線A-Bを設定し、築道部を掘り下げる。墓道にあたる黒褐色埋土部で壺・提瓶・高杯などの須恵器や若干の土師器片が出土。午後3時過ぎ下り坂の天候は遂に雨、現場作業を切り、出土遺物の整理にあたる。
10・11金 (晴)	6号墳にて作業。玄室で玄門石及び奥壁・側壁の一部が出る。築道側壁の一部上面が出たが、巾60cmほど、天井石はない。墓道入口部近くで2石の河原石に接して須恵器完形壺とツマミ付蓋が対で出土、供献されたものか。また墓道北側肩状部から滑石円板形の新鋏車が出た。
10・14月 (晴)	6号墳にて作業。玄室の奥壁2石とそれに接合する南北側壁は扁平な板石を立てている。他の側壁は河原石のかなり丁寧な小口積み、やや網張りのプラン。中央北側の奥壁寄りに銀環、ガラス小玉、管玉等が出土。墓道北側の側壁上面を出す。
10・15火 (曇)	5号墳で墓道へ墓道部の掘り下げ。墓道南側玄門寄りに側壁根石と見られる2石が、また墓道にかかるところ北側で東西に配石されたような数石が出る。6号墳では主体部調査の経過写真を撮影。墓道部主軸線南側の掘り下げ。墓道入口部で4段ほどの積み石を検出。
10・16水 (晴)	6号墳にて作業。墓道部側壁下げを続行。N・Sトレチで墓室掘り方を検出、盛土層序を確認し実測にかかる。
10・17木 (晴)	6号墳にて作業。玄室及び墓道部の掘り下げ。墳丘及び周辺部の地形測量にとりかかる。
10・18金 (曇)	6号墳にて作業。玄室の中央北側砂利面の清掃。墓道部は側壁の清掃と掘り下げ。両壁上部はかなり内傾して不安定な状態にある。玄門寄り、南側の側壁沿いで高さ約30cm、胴径約27cmの須恵器完形壺が出土、脚下部は砂利に埋まっている。大形板状石を瓣位に据えた玄門石が南側で出る。北側には対応するものがない。
10・21月 (晴のち曇)	一昨日の雨にて5・6号墳石室内ぬかるみ状態、乾きを待って、5号墳玄室砂利面の清掃、三色のガラストンボ玉1個検出。6号墳では玄室中央北側の砂利面及び玄門寄りの散礫を平面図化後掘り下げ。京道向用状部がほぼ明らかとなる。

月日(天候)	記
10・23水 (晴)	昨日の雨にて5・6号墳玄室内に掘り下げ壁面の土砂が崩れ落ち、排水に労した。6号墳のSE区、SW区のほぼ中間位置にSE・SWトレントを設け掘り下げる。
10・24木 (晴)	6号墳にて作業。SEトレントで表土下1.1m、巾1.2mの溝状部を検出。SWトレントで深さ20~25cm、巾約1.8mの東西に続き谷斜面に向う溝状部を検出。午後に入って主体部の乾き具合が良く、主軸線南側を掘り下げる。
10・25金 (晴)	6号墳にて作業。玄室主軸線北側の砂利面を平面実測、南側を清掃。墓道のほぼ中ほどで前後に区分するような仕切石の上面が出る。墓道南側部で一部地山底面を検出。鋸いU字状溝をなして幾分北にカーブする。
10・26土 (晴)	6号墳にて作業。玄門部で閉塞石が露われる。墓道入口部近く、先に出た大形壺の手前で須恵器壺蓋が出る。墓道部をほぼ検出する。前庭部にかかる北側肩部沿いで須恵器壺环の外縁及び完形の杯、鐵刀子が縦に並んで出土。また墓門寄りの底部中央でも完形壺が、P-Bの直ぐ傍らから線刻文をもつ戴頭円錐形の勒鐘車が出土した。
10・28月 (晴)	6号墳にて作業。玄室の掘り下げ、南側袖部で完形にちかい鐵斧が出土。墓道部の仕切石を検出。それより玄門部にかけては砂利土がおかれており。墓道前部で約10cm厚むが、余り聞かない。
10・29火 (晴)	5号墳で主体部・墓道部の掘り下げ。玄室の墓底底面を検出。墓道部で主軸線を通る排水溝を認める。墓道北側の貼石状配石を出す。6号墳では玄室及び墓道部の清掃。玄室より水晶切子玉・銀・螺・鐵刀子等出土。
10・30水 (暴のち雨)	5・6号墳とも主体部の清掃を仕上げて写真撮影。5号墳の墓道埋土中に出土した散石を実測後除去、掘り下げる。墓道部排水溝は巾20~25cmほどで黒褐色土が流入する。午後2時頃本格的な降雨のため現場作業を打切り。
11・1金 (晴)	昨日の雨にて5・6号墳とも石室内に水溜りがあり、排水及び泥土の除去に労する。5号墳でE・S・Nトレントの盛土層序を確認、実測にとりかかる。墓道北側の最前部を掘り下げる。6号墳では石室の割り付け、墓道部の平面実測終る。
11・2土 (晴)	5号墳でSトレントの盛土層実測、墓道最前部の検出。6号墳では玄室の平面実測をほぼ終え。墓道北側の地山肩部を検出。
11・5火 (暴のち晴)	5号墳にて作業。玄室の床面プラン及び砂利面、墓道北側の貼石状配石、Nトレント盛土層を実測。
11・6水 (晴)	5号墳にて作業。玄室の側面実測をほぼ終える。墓道部の排水溝を検出。貼石状配石のはじまるところで途切れ、急に巾広いU字状溝となる。U字状溝の底面を検出。
11・7木 (晴)	5号墳で玄室内の清掃、排水溝・墓道部の平面実測。6号墳では玄室の掘り下げ、墓道部の清掃。奥壁前で深さ30cmほどの円状に人骨の痕跡を見る。墓道仕切石の後部砂利面を清掃、前部は地山床面まで下げる。
11・8金 (暴のち晴)	5号墳主体部清掃後、各部所の写真撮影。6号墳で玄室砂利面の検出、砂利間で鉄鑼・鐵刀子片多数出土。人骨痕跡を見たあたりは、中央部より大き目の砂利、層位的に下部にあらるものか。
11・11月 (晴)	5号墳で玄室内的残存砂利磚を除去し墓底底面の検出、中央南側部に1.6×1×0.9m大的の盗掘坑が認められ、坑内より南側中央の側壁が倒石状態で出る。また落ち肩に近い坑内より須恵器半瓶・台付蓋が出土した。抜き取られた北側側壁跡は、巾35cm深さ10cmほどの溝状で漸く検出できた。6

月日(天候)	記
11・12火 (暴のち一時雨)	号墳では玄室中央部の砂利面の平面実測。奥壁前で中央部より大き目の砂利面を検出。ガラス小玉・菅玉・切子玉・金環・銀環等が出土。
11・13水 (暴のち一時雨)	5号墳で玄門部の閉塞石を取り除く、その下部で排水溝と南側で86×60cm、深さ5cmほどの玄門石塊痕跡を検出。6号墳では玄室内を奥壁前の大き目の砂利面に備える。砂利間で銀環・鐵鐵・鉄刀子片等が出土。
11・14木 (晴のち暴)	5・6号墳の中間地域及び5号墳の下方部を地形測量。6号墳で玄室砂利面の清掃、写真撮影。
11・15金 (晴)	6号墳で墓道部の平面実測、玄室砂利面の北側掘り下げ。砂利間にガラス小玉・菅玉・鐵鐵・鉄刀子片等が出土。
11・16土 (晴のち強)	5号墳で玄室内の盃掘坑、側石、排水溝の実測。6号墳で玄門部の断面実測に伴い閉塞石下部の状況を見る。南側玄門石近くで須恵器完形の外3点が出土。玄室主輪線北側部を最下層礫面で備え、清掃後に写真撮影。罐間に沈んだガラス小玉・土玉・切子玉を検出。
11・18月 (暴一時雨)	6号墳にて作業。玄室北側部の礫面除去、蓋板底面を出す。南側部は、奥1/2を砂利面で残し清掃、写真撮影。蓋板仕切石後部の砂利土を除く。
11・19火 (晴)	昨日の雨にて6号墳石室内に水滲り、排水後乾きを待って玄室南側奥1/2の礫面を平面実測。
11・20水 (晴)	6号墳にて作業。玄室兩側部を礫面で整える。南側袖部に近い礫面で上部より沈んだと思われる滑石製筋輪車3点、鉄斧・鐵鎌片等が出土。玄門部で細長の踏み込み石を検出。玄室側壁の側面及び後道床面プランの実測終る。主体部の写真撮影。
	6号墳にて作業。玄室床面プラン及び縱横断面を実測して、予定の調査をすべて終了した。

3. 調査後の措置

調査団は、調査資料の整理作業を進める一方、両古墳の措置について検討を重ねたが、6号墳ははぜひ整備保存策を講じることを要望し、その旨合田不動産に申し入れた。5号墳については記録保存も止むを得ないのでなかろうかと考慮した。

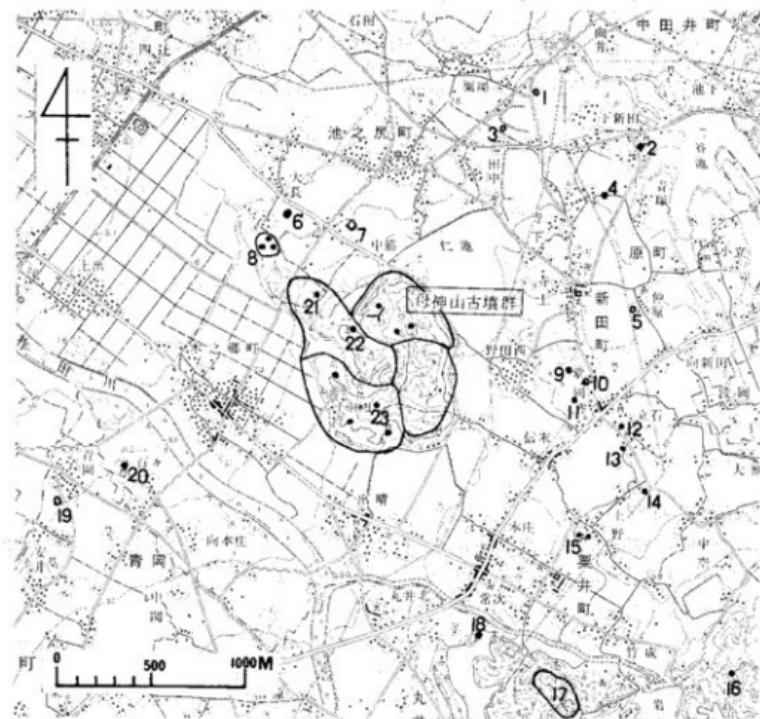
昭和50年6月23日、調査団は、合田不動産に対し「黒島林第5号・6号墳調査の概要報告書」を提出し、両古墳の措置について最終的な協議を行った。その結果、次のような合意をみると至った。

5号墳は、盃割による破壊が著しく、遺構の残存状況が悪いので記録保存とする。6号墳は、遺構の残存状況が比較的良好であるうえ、これまで調査のあった1・2号墳とも異なる形態・内容を示すものなので、現状のままで整備保存して一般公開する。整備保存の具体策については協議し、検討を重ねてゆく。なお、今回調査の対象ではなかった3号・4号・7号墳についても、現状で保存し、おって緑地化する。

調査団としては、今後できるだけ早い時期に合意事項の趣旨にそった6号墳の整備保存を実現すべく努力していかなければならないが、この点についても、合田不動産は積極的な協力姿勢を

示されたことを銘記したい。

なお、調査団は、この合意事項を昭和50年7月1日付で観音寺市文化財保護委員会に報告した。当委員会は、合意事項について、現況では止むを得ない措置であると判断し、今後は調査団と合田不動産が合意事項に留意して黒鳥林古墳群が適切に保存されていくよう指導する旨の意見書を添付して、7月10日付で観音寺市教育委員会あて申達している。



第1図 母神山周辺の遺跡

- | | | |
|-----------------|------------|-------------|
| 1. 下新田原遺跡(弥) | 2. 青塚古墳 | 3. 中新田遺跡(右) |
| 4. 紗綿古墳 | 5. 中原遺跡(弥) | 6. 下羽上古墳 |
| 7. 久栄遺跡(弥) | 8. 長砂古墳群 | 9. 絹塚古墳 |
| 10. 堂ノ岡遺跡(弥) | 11. 幸助蔵古墳 | 12. おう塚古墳 |
| 13. 立石古墳 | 14. 山端古墳 | 15. 上野1・2号墳 |
| 16. 藤の谷遺跡(銅剣出土) | 17. 藤山古墳群 | |
| 18. 平岡古墳 | 19. 中塙遺跡 | 20. 百々古墳 |
| 21. 錦子塚古墳 | 22. 錦帷塚古墳 | 23. 名所塚古墳 |

II. 遺跡の位置と環境（第1・2図）

観音寺市は香川県の西部に位置し、瀬戸内海の雄灘に面した平野部よりなる。市の北側には財田川が、南側には柞田川がそれぞれ西に向って流れ、両者は下流で接近するため、広い沖積平野が発達している。両河川に挟まれた市の東域は、山丘から西に向って派生した低台地のがび、その南縁部に母神山が位置する。母神山丘陵は花崗岩よりなる標高92mの独立丘陵で、西麓には多數の後期群集墳がつくられ、有名な母神山古墳群を形成する。本報告の黒島林第5号・6号墳はその北部の支群に属する2基の円墳である。

観音寺市の遺跡は縄文時代まさかのぼるが、北の庄内半島周辺に比べると遺跡は少なく、調査も全く実施されていない。市の北東部の、財田川に向ってのびた舌状台地の北西端や、海岸に近い高屋町明下の扇端部微高地から縄文時代前期の土器片・石器などが採集されている。また、燧灘に面した北西部の海岸砂丘上に立地する室本遺跡からも縄文後・晩期の土器が発見されている。

(2) 室本遺跡は香川県で最も古い弥生式土器を出土した遺跡として広く知られている。出土した土器は口縁部が未発達で小さく外反し、肩部に段をもち、胴部上半部を中心にへら描き直線文・木葉文・重弧文などが施され、北部九州の板付皿式に併行するものとされている。土砂採取にともなって土器が発見されたため遺跡の状態は明らかでないが、海岸沿いに発達した砂丘の後背湿地を生産地とした小規模な集落遺跡が想定される。

観音寺市における弥生時代の展開はほとんど明らかにされておらず、今後に残された面が大きい。現在のところ財田川と柞田川の下流域には弥生時代の遺跡は少なく、中流域に多いようである。なかでも、流文水銅鐸の発見された古川町の付近（財田川中流域）には弥生時代遺跡が多く、柞田川が平地を形成しあじめる栗井町からは中細形銅劍3口が出土し、また、栗井神社に中広形銅矛1口が所蔵されており、弥生時代におけるこの両地域の重要性が知られる。

古墳時代前期の大規模な古墳は今のところ市内からは発見されていない。市の北西部にあたる七宝山の南西丘陵上にいくつかの前期古墳が分布するが、墳丘をもたない箱式石棺が多い。鹿隈カヌス塚はかつて墳丘が削られた際に2孔を穿たれた舶載鏡の平縁部と小形彷彿壺圓文鏡・銛・ヒスイ勾玉などが採集されているが、最近また、「王」字を有する銘帯部分の破片が採集されている。また、付近では仿製内行花文鏡や貝鏡を伴なった箱式石棺が調査されている。

5世紀代になると、室本遺跡の東側の丘陵上に円墳の丸山古墳が築かれ、内陸部には帆立貝式前方後円墳の青塚古墳が築かれる。両古墳はともに前代の古墳規模を大きくうわまわり、阿蘇熔結凝灰岩製の舟形石棺をもつなど、この時期に古墳のあり方が大きく変っていることがわかる。これは畿内の水軍力としての紀伊氏の瀬戸内海南岸航路掌握にともなう、畿内から九州間の拠点の一つでの在地首長層の新たな対応と考えられている。

観音寺市内の前方後円墳は青塚古墳のはか、母神山古墳群にひさご塚古墳がある。ひさご塚古墳は全長約41mを計り、後円部と前方部の幅・高さともあまり遼わぬ墳丘をもち、5世紀以後の時期が考えられる。母神山古墳群にはひさご塚古墳の西にも前方後円墳がかつて存在していたことが伝えられ、「封土は減少し僅かに巨岩3個、大石数十個ばかり」が現存しているとされてい⁽¹¹⁾る。さらに、母神山の北西にあたる植田町原にも前方後円墳があったことが伝えられているが、現在では開墾されてしまっている。

後期古墳は母神山に50基以上が集中し、有名な母神山古墳群を形成する。母神山古墳群は第2回のような分布をしめすが、それ以外の地域をみると、栗井町射場に9基の円墳よりなる藤目山古墳群があるほかは顯著な群集墳はみられない。後期古墳そのものは各所に散発的に築造されているが有力なものもなく、この時期になると古墳築造が母神山に集約されることが認められる。

歴史時代になると観音寺市域は刈田郡に属し、山本・紀伊・柞田・坂本・高尾郷が含まれる。母神山の南・西は紀伊郷、北・東は山本郷に比定されている。市内の平野部は讃岐の他の平野と同様条里の痕跡が明瞭に残っており、七宝山南端山頂よりS56°Eの線の南に1条が始っている。この線は観音寺市と豊中町の境界にはば相当し、古代にあっても刈田郡と三野郡の境と考えられ⁽¹²⁾ている。

歴史時代の遺跡は市内からはあまり多く発見されておらず、刈田郡々術や柞田駅などの所在は確定されていない。また、寺院跡も比較的少なく、確実なものでは奈良時代前期の重弧文軒平瓦を出土した高屋庵寺や、式内社栗井神社の神宮寺とも考えられ、平安時代後期の瓦を出土した蓋⁽¹³⁾提寺などが知られているにすぎない。

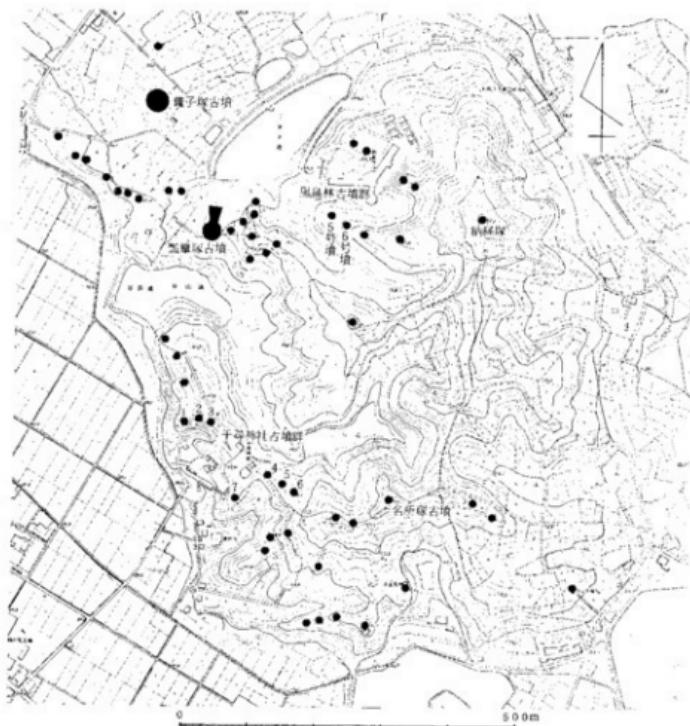
母神山古墳群は香川県内で規模の大きな群集墳として從来広く知られていたが、近年観音寺市教育委員会の努力によって古墳群の分布がはば明らかになった。それによると消滅したのも含めて確実なものは50基を越え、それらは母神山丘陵の西半分に分布している。古墳群は立地より、丘陵北西部の三谷上池周辺に分布するものと、南西部の千尋神社周辺に分布するものとに大きく二つに分けられる。前者は前方後円墳・大型円墳各1基を含む31基の古墳から構成されるが、後者は大型の古墳を含まず、22基の円墳よりなる。そして、両者は谷田池・三谷池を擴する入りこんだ谷によって区分される。

丘陵北西部の古墳をみると、最も東の丘陵最高所には納経塚古墳が立地し、ここから西に向ってのびた南北二つの丘陵屋根上にも各4基の円墳が立地する。付近は式内社黒島神社の所有地であったことから從来黒島林支群と呼ばれてきたもので、本報告の黒島林第5号・6号墳は南側丘陵の先端部に立地する2基の円墳である。

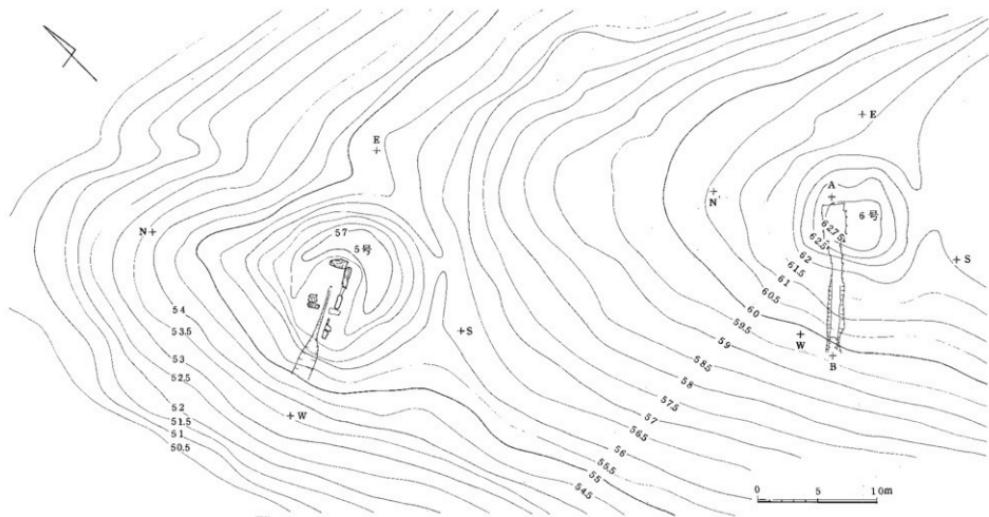
（註）

1. 大平要編『四国地方細文時代遺跡地名表』1976。
2. 松本豊胤「讃岐・室木町の弥生式土器」『上代文化』27 1957。
3. 上原準一「讃岐三豊郡一ノ谷村川発見の銅鐸に就いて」『考古学雑誌』13-11 1923。観音寺市文化財保護協会『観音寺市の文化財』 1977。

- 高橋邦彦・森井 正か『さぬきの遺跡』 1972。
- 梅原末治「銅鏡銅鏡に就いて」『日本考古学論叢』 1940。
- 高橋邦彦・福家惣衛ほか『觀音寺市史』 1962。
- 觀音寺市教育委員会 二宮嘉幸氏の御教示による。
- 註3・6と同じ。
- 藤田憲司「讃岐の石棺」『倉敷考古館研究集録』 12 1976。
- 註9と同じ。
- 觀音寺市文化財保護協会『觀音寺市の文化財』 1977。
- 註6と同じ。
- 高重 進「讃岐の石室」『広島大学文学部紀要』 25-1 1965。
- 安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会報特別号』 8 1968。
- 觀音寺市教育委員会 二宮嘉幸・矢野道夫氏の努力によるとところが大きい。



第2図 母神山古墳群分布図



第3図 黒島林第5号・6号墳 地形測量図

III. 調査の記録

1. 黒島林第5号墳

本墳は、母神山頂部より緩く弧を描いて北西に下降する尾根の先端部に位置している。上方約25mに6号墳があり、さらに27~28mほどのぼって7号墳がある。下方はやや下って、尾根筋の緩下降する広がった地形となって三谷上池に至る。東側には、山頂に向う小道が墳丘に接して通り、浅い谷を隔てたすぐ向いに観音寺荘の建物がある。西側は墳裾部あたりからかなりな勾配の谷斜面となっている。

本墳頂部には相当以前から盗掘や石材抜き取りによると思われる大きな陥没坑があり、坑内に大形の奥壁・玄門石の上半部が露見していたため、1~3号墳とは内容・性格を異にするものとみなされてきた。調査前その6×3.5×1.5m余の坑内に戸板・柱木・トタン板等が雑然と重なり、坑底には深さ20~30cmの溜水があって腐臭を漂わせていた。

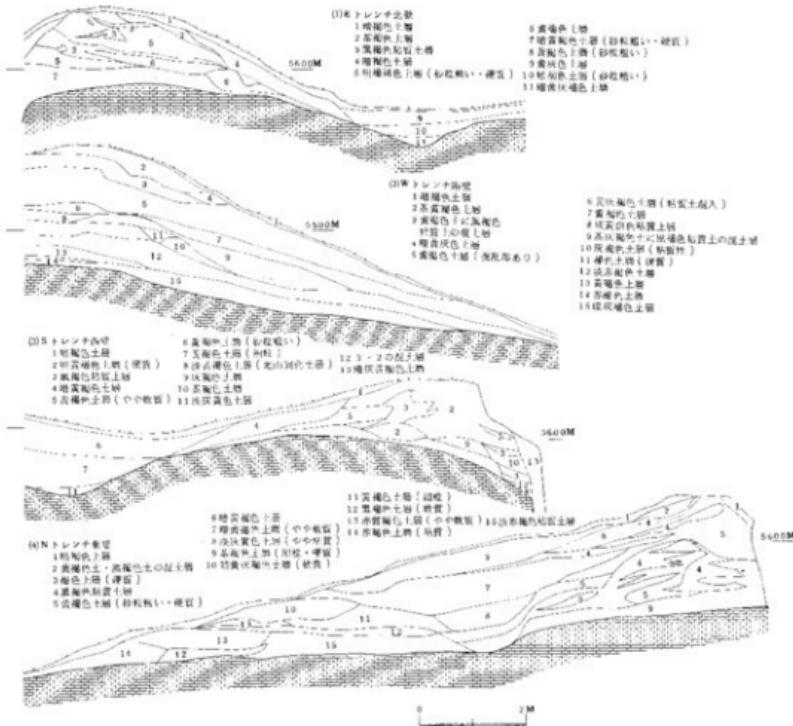
調査は、地形測量によって墳丘の現状と立地を把握し、主軸線のE-Wトレントとそれに玄室中点で直交するS-Nトレントを設定して、墳裾部、墳丘の盛土過程、石室の構築、墓道・前庭部の状況などを明らかにすることを意図した。

(1) 墳丘（第4図）

墳丘は、南側ではほぼ原状にちかいと思われる円形を保っているが、北側では尾根筋にそって盛土が流出したようになって円形が崩れている。南側E~S区に巡っている巾2m前後の凹地は、古墳築造時に尾根筋を切断して地山整形した墳裾地点を示すもので、その墳頂部よりの距離をもって墳丘規模を推しはかると径15~16m、高さは東西側から2m余と見受けられた。

その後、S-Eトレントにおいて巾1.1~1.4mの地山整形による溝状部が認められた。両溝状部は玄室中点からほぼ同距離にあり、標高差も僅か20cmほどで、これが原墳裾地点を明示するものとした。そこで、玄室中点から約10m、標高54.5~55mをもって墳裾部とするのが妥当であるとし、見かけ上の規模より大き目の径約20mの円墳となる。現墳丘高はS-Eトレント溝状部から2.5mほどであるが、原墳頂については墳頂部の盛土のことを考慮して、少なく見積っても奥壁上端より1m高い標高57.6m、即ちS-Eトレント墳裾部から略3m高であったと推測する。

さて、Nトレントにおいても玄室中点から6.7m地点で溝状部様の層序が認められた。しかし、これを北側墳裾地点とするなら、東西側に長い卵形の墳形になるのはよいにしても、主体部が余りに北側に偏在することになる。また、これをたどって墳裾線を画けば墓道部の貼石状配石が1mほど墳丘外に出て存在することになる。このように、墳裾溝状部とするには不都合であり、あくまで溝状部様の層序として留意したい。



第4図 5号填築丘断面図

ところで、S・Eトレントの墳裾溝状部は、それによって墳丘規模を決定するとともに、墳丘を際立たせる意味を有している。こうした溝状遺構は斜面に築造された古墳において一般的に認められるもので、概して墳裾を巡り前庭部に向けて開口している場合が多い。その形状から馬蹄状溝と呼称したりする。本墳においても、SW区（墳丘南西1/4区画）中ほどのトレントで、前庭部に向けて開口するかたちで谷斜面に消える溝状部が認められ、馬蹄状溝の存在を予想させた。しかし、墳丘の北側部では墳裾溝状部の存在を想定し難いし、Nトレントでも溝状部は存在しなかった。本墳では、尾根筋に立地するため、墳丘規模やプランが決まる東南側高い方の斜面を掘り下げて墳裾溝状部を造ったが、北西側低い方では旧表土を削り取った程度で、ほとんど地山整形をせずに盛土したようである。

盛土の状況を各トレントにおいて見よう。Sトレントでは、玄室中点から14m前後、標高56.5mあたりより約5m巾で掘り下げ、おそらく旧表土下1.4～1.5mを測る溝状部を造り、その内側法面の傾斜に続く盛土をしている。盛土は不整序であるが、主体部に近いところで花崗土に黒褐色粘質土を混えながら4次ほどの盛り固めをし、その後傾斜面に墳形を整える盛土をしている。なお、墓壇肩部の上位に地山面と平行状で20～25cm間隔、3層の灰褐色粘質土層が見られるのは、主体部裏どめ用をなす盛土であろう。

Eトレントでは、元来尾根筋から斜面にかかるところであるため、地山掘り下げの巾、深さをともに減じて、南側墳裾部に相応させている。ここでは、花崗土と黒褐色粘質土を互層状にして、溝状部内側法面の傾斜に合せて概ね5次に盛り固めており、その後傾斜面に墳形を整える盛土をしている。

Nトレントでは、前記の溝状部様層序に注意を引いたわけだが、その上部に安定した土層が見られるし、外側には小盛土層序があるところから、次のように考慮した。

本来、北側墳裾部をこの溝状部様層序の位置に求め、外側の小盛土部には本墳に係る何等かの施設を構築する予定であったのが、墳丘の規模や主体部の位置からみて、その間の溝状部が余りにも不釣合、不都合な観を呈するため、これを埋める盛土をして墳丘を造成したのではないかろうか。ちょうど、溝状部様層序の上部路土層の端部は小盛土部の頂面にかけて終っているし、そのあたりは玄室中点から約10m、標高55mを測り、墳裾部とするに適したところもある。ただ、外観上においては、そのあたりで明瞭な傾斜変換を見るわけなく、墳裾部とは定め難い。しかし、上述の如き考慮からすれば、墳丘北側部は特に墳裾を画すことなく盛土をなしたものであり、むしろ小盛土部外側の傾斜に続く墳丘斜面になったと解され、この側では少々の盛土流出があるにしても、余り大きく原状を変更していないものとした。

小盛土部はほぼ平坦な地山面におおまかに3層の盛土をなし、中央部で1mほどの高さをもつものであるが、何等の遺構・遺物も認められなかった。

なお、このトレントの主体部近くでは、花崗土との互層を意図した黒褐色粘質土が他所に比べ多量に見られ、その盛り固めも厚く、硬いものである。

以上、盛土の状況を各トレントにおいてみてきたが、全体的に丁寧な盛土とは見受けられず、盛土過程を十分明らかにすることは出来ない。

墓道は、U字状溝のはじまるところから、それが終る玄室中点より11~11.3m近辺までとした。U字状溝のはじまる玄室中点より4.5~5mあたりは、確かに前後の施設を区分するような状況にある。そこは、主軸線を通る巾24~25cmの排水溝から、傾斜が変換して次第に巾広となるU字状溝がはじまるところというだけでなく、そこよりU字状溝は玄室一羨道部の主軸線より5度ほど北にカーブしており、北側盛土肩部には貼石状配石が見られる。また、そのあたりで地山を掘り下げた墓塙底面も終り、明らかに羨道側壁の根石状配石と見られる南側残石の在り方も、そのあたりが羨道入口部にあたることを示している。

さて、墓道において注目されるのは、U字状溝の北側盛土肩部に残る貼石状配石である。玄室中点より5~7.3m間にはほ同レベルで10数石残るが、特に中の3石は小口をきちんと内側の線に描いた貼石状態であり、原状と思われる。ただ、最前部の残石は2段積みになっており、U字状溝内にも転落石をいくつか見たので、本来は段積み状態にあったものかもしれない。しかし、残石や周辺の状況から推して何段にも成る石積みではなかったであろう。いずれにせよ、この部分を羨道部に強い関連性をもつ施設、付帯施設として考えるが、南側の肩部には対応する残石もなく、痕跡も不明であり、遺構の現状では十分な判断を下し得ない。

ところで、U字状溝の巾の広がりは、玄室中点より5mあたりから急となり、貼石状配石の前部で最大1.7~1.8mを測る。また、その底部の傾斜は、玄室中点より5mから11.3m地点までは一様であり、比高差は1mほどとなっている。

墓塙については、各トレンチや主体部の掘り下げによって、次のようである。

S-Nトレンチで検出した墓塙削巾は約35mであり、南側で70~80cm、北側では30cmほど地表面を削り下げて底部を平坦にしている。東側は、旧尾根筋にあたる地表面を約1m掘り下げている。東一西の掘り下げは7m長ほどで、断面L字形を呈し、底部は僅かに傾斜をもたせている。墓塙平面は長方形に属するが、その市は玄室中央部から玄門部にかけて次第に狭くなり、西端の羨道入口部では2mほどとなる。

(2) 石 室 (第5・6図)

本墳の内部主体は、主軸線をN61°Eにとり、尾根に直交して略南西に開口する両袖形の横穴式石室である。

玄室・羨道部ともに盗掘や石材抜き取りによる破壊が著しく、その全容ははっきりしない。玄室では、既に露わであった奥壁と北側玄門石の他に南側で2石、北側で1石の側壁が残るのみで、床面の搅乱もひどく、そのうえ主軸線南側中央部の墓塙下に1.6×1×0.9m大の盗掘坑が認められ、坑内に南側中央の側壁が倒れ込んでいた。また、羨道部においても原状を維持していると見られるのは南側に残る3石のみで、規模や形態等については、周辺の状況から推測するほかはない。なお、現存の使用石材は、奥壁が凝灰岩、玄門石が玄武岩、他はすべて砂岩の転石である。

玄室は、長さ3.4m、奥巾1.6m、中央巾約1.9m、前巾1.6mを測り、幾分胴張りをもたせている。ただ、奥巾、中央巾は検出した側壁跡を目安として計測したものであるが、南側2石の内面線をたどっても中央部で幾分膨みをもつことが判る。

奥壁は用石中抜きんでて大形の一枚岩で、高さ2.26m、上部で巾狭となるが中ほどで巾約1.5m、厚さ60~64cmを計る。北側下部には、床面との間隙をうすめて埋置の安定を図る36×14×12cmの詰め石が残る。今、20度ほど内傾しているのは床面下の埋置が15~20cmと浅かったためかと思われるが、外側下半部がほぼ直になっているところをみると、本来的なものとも言えそうだ。

現在の3側壁は、いずれも腰石としての配置である。奥壁の外側に接合する側壁は40cmほどが重なるかたちをとり、下部の間隙には小形の4石を詰めている。あと2石は玄門石に接合するものであるが、北側のは玄門石の中ほどに内側面が位置するよう突き合わせている。南側も、検出した玄門石跡からみると北側同様に突き合わせて袖部をつくっていたものである。この2石がともにかなり内傾しているのは、2次的な傾きにもよる。

南側で欠けている中の側壁は、墓塚下の盜掘坑内に出た80×63×25cm大の倒石で、その埋置跡が両側壁間に検出された。また、北側の側壁埋置跡も、不明瞭ながら巾34~40cm、深さ7~10cmの溝状で漸く認められた。

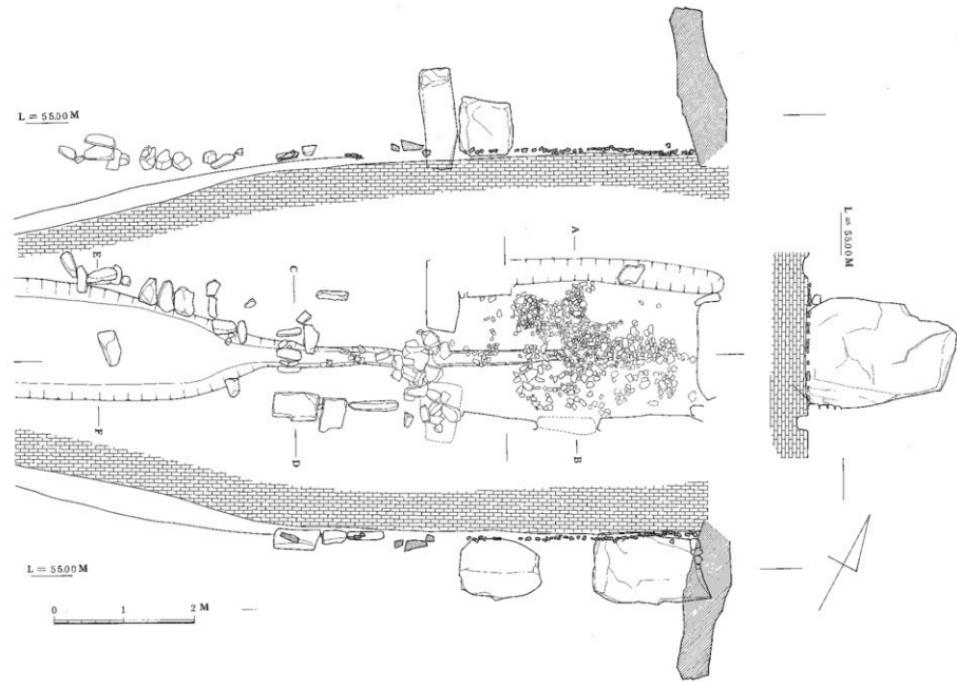
北側玄門石は、1.4×0.8×0.5m大の柱状石で、外側上辺部が欠けているが、石面は平たんに整っている。これに対応する南側玄門石は抜き取られ、その埋置跡が崩れた閉塞石下より86×60cm、深さ5cmほどの方形窪み状で検出された。これによって、両袖部の長さ40~50cm、玄門の巾約70cmであったと推測した。

玄門部には、2~3段の乱積みで30×20×15cm前後の20数石が残る。南側玄門石跡にあったものは、明らかに玄門部に積まれていたものが、玄門石の抜き取りによって崩れたものである。こうした状況からも閉塞施設の遺存と理解するが、北側玄門石の高さからすれば残石数が少なく、複数もあるって、本来どのような閉塞状況であったのかは知り難い。

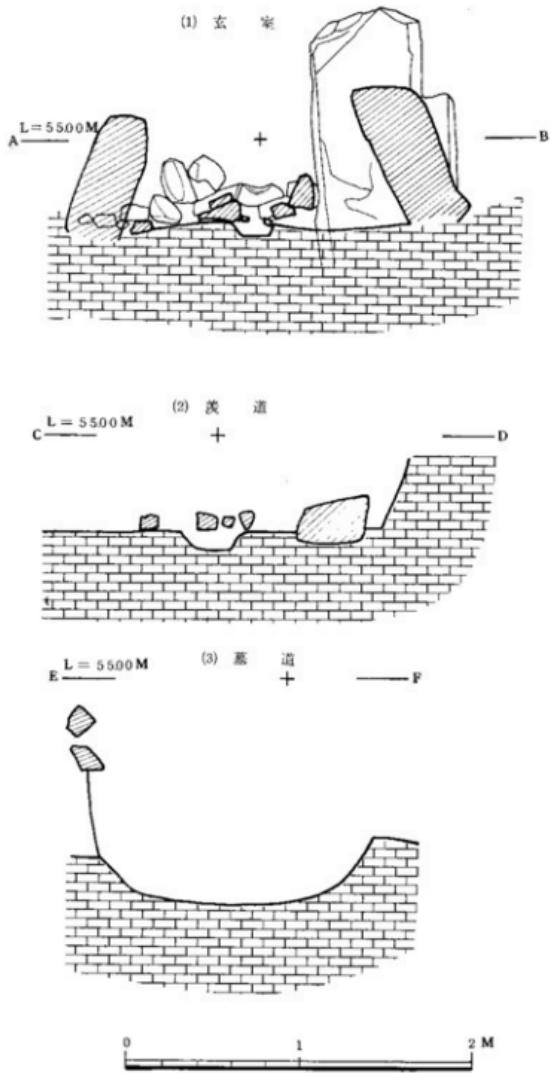
玄室の床面は、砂利・礫を敷設したものである。中央部から奥壁寄りに大小の砂利・礫が残るが、それらは搅乱による集散が見られるし、現存量ではとうてい床全面を造るには足らず、どれほどの厚さで敷設されていたものかは不明である。ただ、砂利・礫の大小差から大き目の礫を下面に、小礫や砂利を上面に敷いて床面としていたのではないかと想像する。それにしても、現存量がこれほど少ないのはなぜか。盜掘破壊で外部に運び出されたのだろうか、だとしても、墓塚下の盜掘坑といい徹底した仕業だと言うほかはない。

羨道部については、床面のプランを示唆する南側の3石や排水溝によって、次のように考慮した。

南側の3石は根石様の配置であり、うち玄門寄りの1石は細長石を横位に据えたものであるが、おそらく上に平板な石を置いて積み石をしたのであろう。この3石の内側をたどる線は、主軸線上に50cmばかりの間隔ではば平行し、玄門石跡への見通しによれば約20cmの袖部をなすことになる。そして、排水溝がちょうど主軸線を通るところから、羨道部は排水溝を軸にして対称的なプランであったものと想定した。これによれば、床面巾は1m前後となり、北側の袖部も約20cmとなる。



第5图 5号填石室剖测图



第6図 5号墳石室横断面図

羨道部の長さについても、状況よりの推察によるほかはない。確かに、玄室中点より4.5～5mあたりは前後の施設を区分する状況にある。たとえ、羨道部を玄室長に相応したものとして、U字状溝の北側盛土肩部の貼石状配石のあるところまでと考えようにも、いくつかの無理がある。貼石状配石を羨道部の残石だとすれば、原状を維持すると思われる中の3石の在り方からして、入口部に向ってかなり大きく外開することになる。この場合、南側でも残存3石の位置からして、U字状溝の広がりに応じて外開することになる。このように羨道部が中ほどからかなり大きく外開するプランは考えられ難いし、それに合わせて排水溝から床全面に広がるU字状溝にかかるということも不都合であろう。やはり、玄室中点より4.5～5mあたりが羨道・墓道を区分するところとした。羨道部長は22～23mと推測する。なお、床面は墓壇地山面のままで、砂利・礫等の敷設はない。

排水溝は、墓壇下の盗掘坑により玄室中央で途切れているが、本来は奥壁前からはじまるものであろう。それは玄室より閉塞石下を通じてほぼ直に羨道部を抜け、U字状溝に吸収される。その形状は、断面梯形状で徐々に巾・深さを増し、羨道入口部では巾約40cm、深さ12～15cmを測る。現状では、溝の底・側面及び上面に格別の備えを用いない柔掘りの排水溝と見受けられる。

(3) 出土遺物

① 出土状況

遺物は玄室・羨道・墓道及び溝状部から出土した。出土遺物の大半は須恵器・土師器片で、装身具は玄室からの僅か3点、鉄器の出土はない。須恵器・土師器片は、羨道埋土中からものが最も多く、次いで墓道からもかなりな出土をみた。

玄室・羨道は、古く既に盗掘や石材抜き取りにより大きな破壊を受けている。玄室の床面攢乱は著しく、そのうえ中央南側部には墓壇下にも深く掘り込まれた盗掘坑があった。漸く、残存する砂利礫面を清掃して、蓋りこぼしと思われるガラストンボ玉1個（第11図2）、ガラス玉1個（第11図1）、耳環1個（第11図）が見つかり、盗掘坑の落ち肩に近い坑内より須恵器台付壺（第9図14）、平瓶（第8図19）が出た。また、奥壁前の堆積泥土中より土師器土鍋文脚（第10図9）が、北側壁埋置跡より須恵器小形の高壺（第8図2）が、玄門部では須恵器短頸壺（第8図8）・盤壺部片（第8図15）が出土した。この他に須恵器片10数点、土師器片数点が散布的に出土したが、前者には壺身（第7図24～26）、壺蓋（第7図4～18）、碗（第7図29）台付碗（第7図30）・短頸壺（第8図10・11）・長頸壺（第8図16～18）・台付壺（第9図2・3）・盤及びその脚部（第8図12～14）等がある。土師器では瓶把手（第9図7）がある。これらを層位的に判別することは、複雑が著しいため困難であるが、おおまかに副葬された位置や器種の組み合わせなどを示唆していると言えよう。

墓道埋土中からも須恵器片數十点、土師器片数点が出土したが、須恵器片からは壺身（第7図22・23）・壺蓋（第7図15）・高壺脚部（第8図1・3・5）・甕口縁部（第10図2・3）等が復元できた。また、羨道入口部から5m前後の南側肩状部より大型甕の破片（第10図4）がかたまって出土し、北側貼石状配石前方の肩状部よりも須恵器・土師器片各10数点が出土した。後者の中に

は、須恵器高坏脚部（第8図4）や前庭部出土の短頸壺とセットをなす蓋（第8図6）がある。前庭部出土、とするには聊か前庭部の状況は不明瞭であるが、短頸壺（第8図7）の他に坏蓋（第7図9）、土師器甕口縁部（第10図5・6）等が浅いところに点在していた。

さて、溝状部においても遺物の出土をみたのは興味深い。Sトレントン溝状部では、溝内河原石の近辺より土師器甕把手（第10図8）や須恵器片数点が、Eトレントン溝状部でも須恵器短頸壺（第8図9）が出土している。そして、SW区トレントンの溝状部においては、須恵器大形甕の口縁部（第9図5・6）。体部片が3～4個体分、壺片が10数点出土した。そのうち、台付壺（第9図1）がほぼ完形に復元できた。これらの出土状況が示す意味については、溝状部に供献されたものか、或は墓前祭祀に使用されたものが故意に破碎され、溝状部に捨てられたものなのか、などと推考するが、溝状部の全体については未確認でもあるし、一概に言明できない。

③ 遺物

イ 須恵器

坏 蓋

つまみ、口縁部内面のかえりの有無や形状などによって5分類する。

I類：つまみ、口縁部内面のかえりをもたず、天井部は丸い形態でヘラ削り、他はナデ調整をしている。

I a類（第7図1・2）：天井部と体部の境で僅かにくぼむ。器壁は口縁部にかけて著しく薄手となり、端部で1はやや外反し、2は内彎する。口径14.2～14.6cm、器高4.4～4.5cmほどで、ほぼ同形大である。ともに焼成良好で内外面青灰色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。

I b類（第7図3）：口径12.3cm、1・2に比して小形であるが、器壁は厚手である。口縁部は内彎ぎみに外反し、端部は丸味を帯びる。焼成良好で外面灰黒色、内面灰色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。

II類：つまみ、口縁部内面のかえりをもち、かえり径8.6～9.5cmの間を測る。

II a類（第7図4・5）：宝珠形のつまみをもち、扁平な形態である。4は焼き垂みがあって、特に扁平化しているが、本来、天井部から口縁部にかけて緩く下がって、体部で薄く、口縁部で幾分割厚する5に似通った形態となるものであろう。4のかえりは5mm高で、かなり内傾して尖る。5の口縁端部は丸味を帯びて身受け部よりやや下がり、かえりは残存する基部の形状から4と同形大のものが推測される。ともに焼成良好で堅緻、外面全体に灰褐色自然釉が付着する。

II b類（第7図6～11）：ボタン形状のつまみをもち、口縁部内面のかえりが端部に隠れてしまう形態で、正確には6・7が該当する。天井部から口縁部にかけて丸味を帯びて下がり、弱い稜線が2～3本入る。9も同形状の天井部を有したものと見られる。器壁は7が厚手であまり変化なく、6・9が口縁部にかけて薄くなり、身受け部はいずれも薄く引き出されている。つまみは、6・7が上部中央で僅かに高まり、逆に7・11は窪む。調整は内面頂部で仕上げナデ、他は横ナデである。胎土に砂粒をごく少量含み、焼成良好で6・7の外面には灰黒色～灰緑色自然釉が付着する。なお、8は口縁部の形状が他と明らかに相違するが、端部径11cm、かえり

径 8.9 cmを測り、6・7・9とはほぼ同大で、ボタン形状のつまみをもつタイプに属するものとして、一応此類に区分した。身受け部は端部にかけて上がり気味、かえりは 3 mm高でやや内傾して尖る。胎土・焼成とともに良好で内外面灰色を呈す。

III類(第7図12~14)：扁平な形態で天井部が広い。口縁部内面のかえりは 4~5 mm高で内傾して尖り、かえりの径は 10.6~11.5 cm の間を測る。14はボタン形状のつまみをもち、器壁が厚手で、口縁部も短く厚い。一部焼き歪みが見られる。12・13の口縁部は薄く長く引き出され、端部は12が丸味をもち、13が尖る。いずれも、胎土に砂粒を少量含み、焼成良好で内外面青灰色を呈し、外面に灰緑色自然釉も付着する。

IV類(第7図15)：端部径 16.8 cm、かえり径 14 cm である。口縁部にかけてかなり傾斜で下がり、端部を尖り気味に仕上げている。身受け部が端部より 2 mmほど上がり、かえりは身薄でかなり内傾し、脆弱に見える。焼成は良好、内外面灰色、胎土に砂粒を少量含む。

V類：端部径 9~10 cm、かえり径 6.3~7.7 cm の間を測る小形のもので、壺蓋或は長頸・直口壺等の蓋の可能性を考える。

V a類(第7図16~17)：16の天井部は平坦状で、口縁端部が尖り、身受け部が不明瞭、4 mm高のかえりはかなり内傾して鋭く尖る。17は口縁部にかけてやや丸味をもって下がり、身受け部が平坦で、端部は丸く仕上げている。かえりは 3 mm高で直立して尖る。ともに、胎土に砂粒を少量含み、焼成良好で灰色~灰黒色を呈し、17の外面には緑色自然釉が薄く残る。

V b類(第7図18)：つまみは 9 mm高で、上部中央が僅かに高まる。天井部と体部の境で薄く、口縁部で肥厚する。端部は丸く仕上げ、身受け部が 1.5 mmほど上がる。かえりは厚く頑丈である。外面全体に灰緑色自然釉が付着し、胎土に砂粒を少量含む。

环身

口縁部に受部がつくもの、つかないものとで 2 分類する。

I類：口縁部に受部がつくものであるが、その形状によって区分する。

I a類(第7図19~20)：口径 11.1~12.6 cm、たちあがり 6~8 mm の間を測り、受部が明瞭である。19・20の受部は 1~3 mmほど窪み、端部が丸味を帯び、21は受部が短く平坦、端部が尖り気味である。たちあがりは、いずれにしても基部で厚く、やや内傾して、先端が直に立ち尖る。底部は平坦、体部でかなり薄くなる。胎土精良で焼成も良好、青灰色~灰黒色を呈す。

I b類(第7図22~23)：口径 12.3~12.7 cm。受部が短く、端部は尖り気味、たちあがりも 4~5 mmで尖る。22・23はほぼ同形大、22は胎土精良、焼成良好で内外面に淡灰緑色自然釉が付着するが、23はやや焼成が甘く軟質である。

II類：受部をもたず、口径 9.7~10.5 cm、器高 4.0~4.2 cm の間を測る。底部の調整法によって 2 区分する。

II a類(第7図24~25)：底部がヘラ切りにより調整されている。内底中央部に仕上げナデ、他は横ナデ調整である。24の底部は中央部にかけて 2~3 mmほど窪み、25はほとんど平坦である。ともに、口縁部にかけて外反、次第に薄手となり、端部を丸くおさめている。焼成良好で堅緻だが、一部に焼き歪みがある。青灰色~灰色を呈し、24の外面には灰緑色自然釉が付着する。

II b 類(第7図26・27)：底部がヘラ削り、他は横ナデ調整である。26は底部が平坦にちかく、体部との境が角張り、さらに底部寄りに傾斜変換の強い棱線が入る。27は底部が丸味をもち、中央部に長さ約 6.8 cm のヘラ記号沈線がある。体部との境は薄く、口縁部にかけてほぼ一様の厚さである。口縁部にかけての外反は、27の方が強い。ともに、焼成良好で、外面の一部に灰黒色自然釉が付着する。

塊(第7図28～30)：28は口径 9 cm、胸部最大径 9.9 cm、器高 6.4 を測る。胴上部の沈線が器形を引き締めている。丸味を帯びる胴部から口縁部にかけては、やや内彎し、端部で僅かに外反する。底部はヘラ削りで平坦、他は横ナデの調整である。胎土に砂粒を少量含み、外面に灰綠色自然釉が付着する。

29は口径 11.2 cm、胸部最大径 11.1 cm、器高 9.6 cm。底部はヘラ切り後に横ナデの調整が施され、丸味を帯びる。胴部の下位に 2 条の平行沈線が入り、中ほどから口縁部にかけてはほぼ同厚で直に引き上げられ、端部を尖り気味に仕上げている。胎土に砂粒を含み、外面及び内底部に灰綠色自然釉が付着する。

30は口縁部を欠くが、高台付の塊である。胸部最大径 12.4 cm、台部高 1.5 cm、台端部径 8.6 cm を測る。胴部下位に 2 条の平行沈線が入り、中ほどから口縁部にかけては徐々に薄くなり、内彎する。台部は端部で肥厚し、下端は平坦である。胴部の横ナデは丁寧な調整で、胎土もよい。外面灰色を呈し、台部の半周ほどに灰綠色自然釉が付着する。

高 块

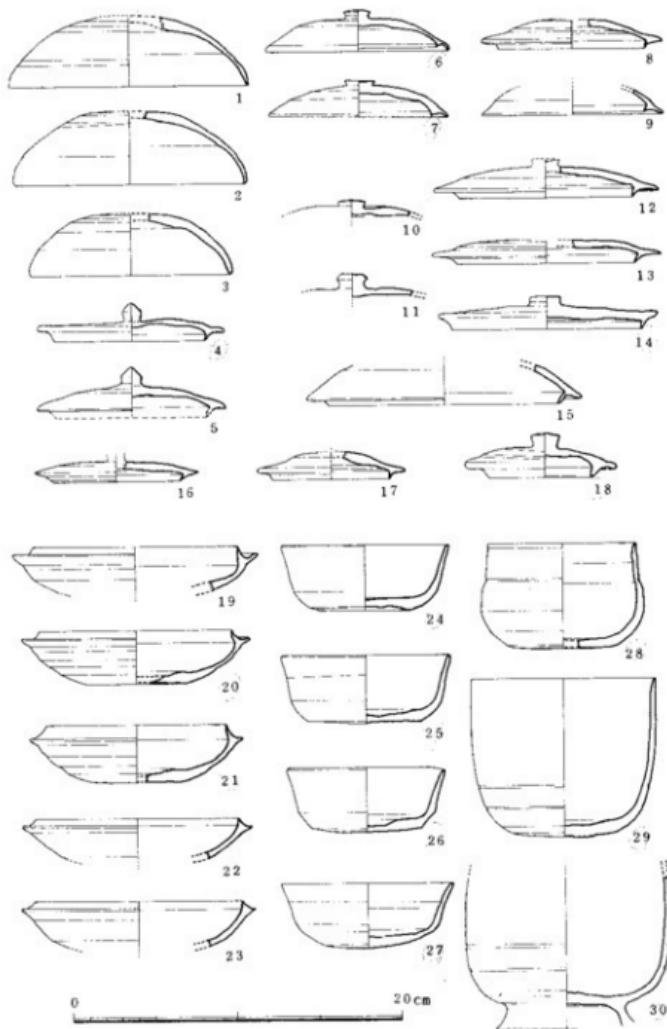
脚部の長短や形態によって 3 分類する。

I 類(第8図1・4)：1 は長脚、透孔が上下 2 孔入る。上孔は环底部までの切り込みで、上下孔間に 2 条の平行沈線が、さらに下孔の直下にも 2 条の平行沈線がめぐる。脚部の器壁は接合部で厚く、脚裾部にかけて次第に薄くなる。脚上半部の内外には絞り目が顕著に残る。底部は中央から直線的に体部との境に向い角張る。外面灰黒色を呈し、脚部半周ほどに自然釉が着く。胎土に砂粒を少量含む。

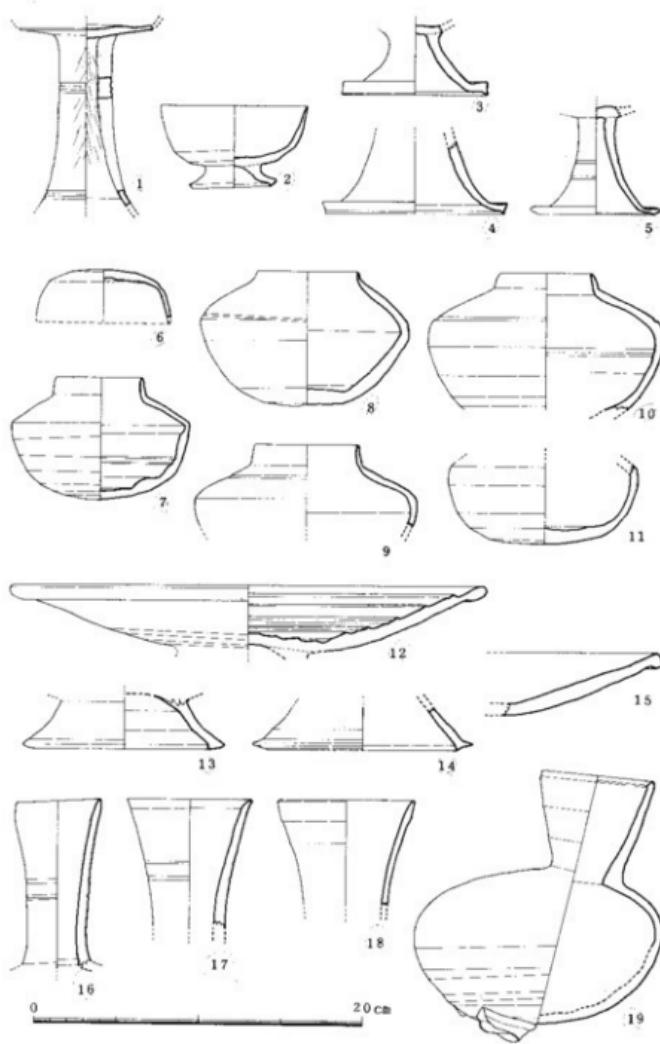
4 の脚端部径 10.9 cm。端部は上端が幾分はねかえり、下端は内面が 2 mm 高で尖る。胎土は精良だが、焼成甘く軟質である。

II 類(第8図2・3)：短脚で透孔がない。2 は器高 5 cm、环口径 8.9 cm、脚高 1.3 cm、脚端部径 5.3 cm の小形品である。环部は丸味を帯び、口縁部にかけて外反させながら薄く引き上げ、端部を尖り気味に仕上げている。胸部は中ほどから角度をかえて外開し、端部は上端を 3 ~ 4 mm はね上げ、下端を短く引き出している。3 の脚部高 3.6 cm、脚端部径 8.9 cm を測る。脚裾で大きく外開し、端部は上端が幾分はねかえり、下端が外方に短く引き出されて尖りぎみである。2・3 ともに焼成良好で外面灰色～灰黒色を呈し、この外面 1/3 周ほどに薄く緑色自然釉が着く。

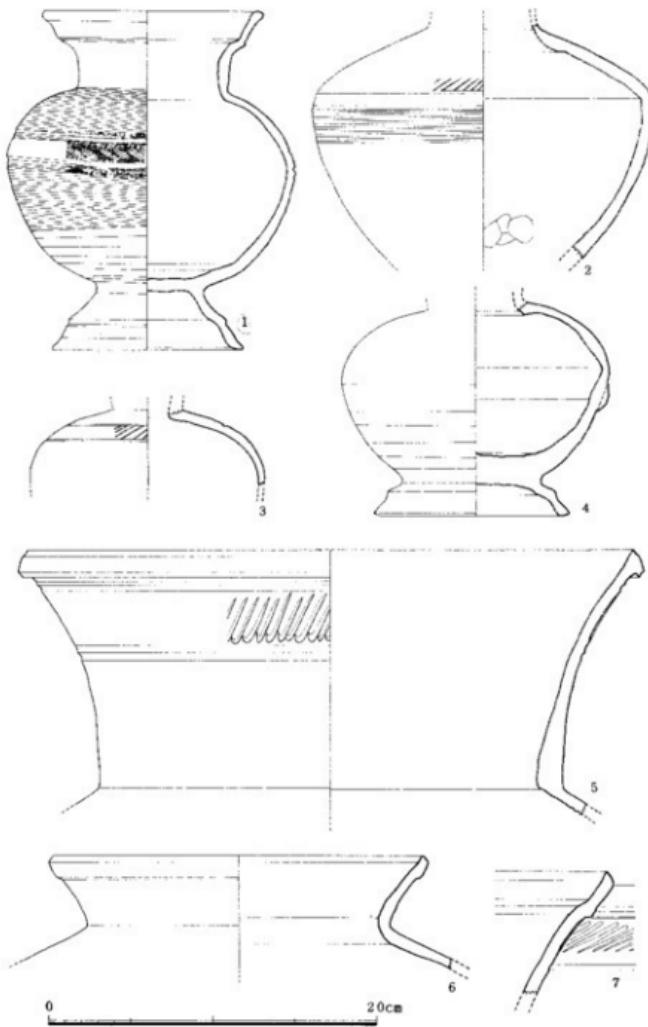
III 類(第8図5)：短脚だが II 類とは形態が異なり、全体に華奢な観を呈す。脚部高 5.9 cm、脚端部径 8 cm を測り、中ほどに 2 条の平行沈線が入る。器壁は脚裾部にかけて次第に薄くなり、引き出した端部でやや肥厚する。丁寧な横ナデ調整が見られ、外面に灰綠色自然釉が付着する。



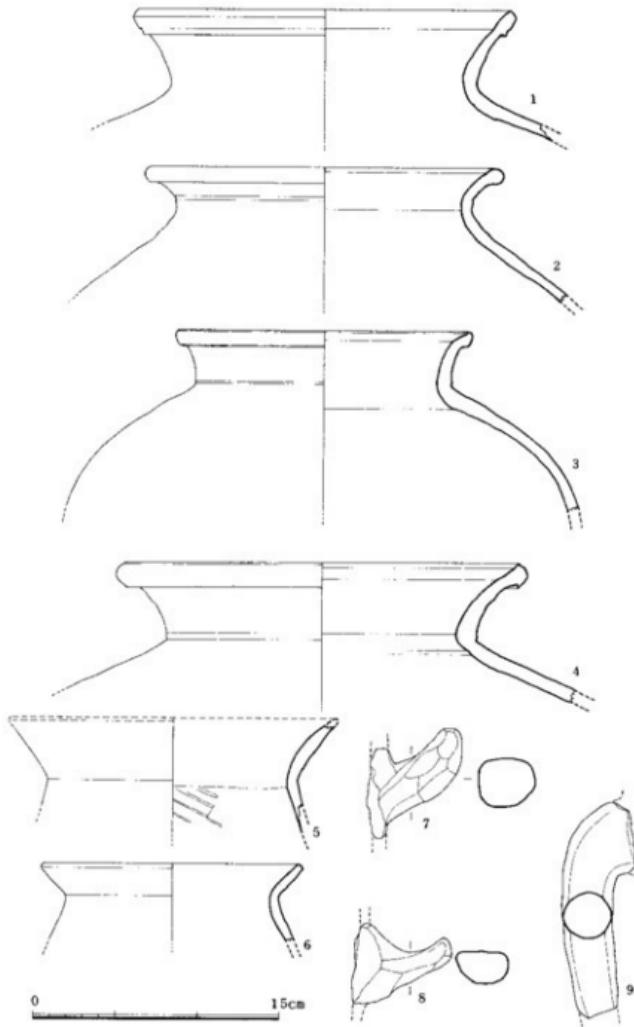
第7圖 5号墳出土須磨器(1)



第8図 5号墳出土須須器(2)



第9圖 5号墳出土須恵器(3)



第10図 5号墳出土須恵器(4)、土師器

短頸壺

口頸部の形態によって2分類し、胴・底部のみが残るものをⅢ類とする。

I類(第8図6)：口頸部の高さが9~13mmを測る。7は器高7.4cm、口径5.3cm、胴部最大径10.8cmで、口頸部はやや内傾して端部が尖り氣味である。肩部は直線的に下がって胴部との境で角張り、それより底部にかけて丸味を帯びる。胴・底部内の調整は粗く、横ナデによる凹凸が著しい。6は7とセットをなす蓋である。口縁部を欠くが口径8cm、器高3.2cmほどか。9は口径6.4cm、胴部最大径13.5cmで、口頸部は幾分内傾させ、丸味をついている。肩部の中ほどに弱い沈線が一条めぐり、胴部との境は角張らない。10は口径が5.6cmと小さく、胴部の張り出しが大きい。最大径14.3cmを測る。口頸部は内脣氣味に引き上げ、端部を尖り氣味に仕上げている。肩~胴への移行部に一条沈線があり、胴部は丸味をもつ。7・9・10いずれも焼成良好で内外面青灰色を呈し、堅緻である。

II類(第8図8)：口径6.1cm、口縁部を肩部からごく短く引き上げ、尖り氣味に仕上げている。肩~胴への移行部は5~9mm巾で平坦状となり、沈線が一条入って最大径12.7cmを測る。胴部は丸味を帯び、底部はヘラ削りにより平坦にちかい。胎土に砂粒を少量含み、肩・胴部にはかなり厚く緑色自然釉が付着する。

III類(第8図11)：残存部の形状から推して短頸壺として分類した。肩部との境で最大径11.5cmを測り、胴~底部にかけてヘラ削りによる稜線が数本入り、底部で肥厚する。内外面青灰色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。

高台付盤

盤の内面に突帯装飾が施されているものと、横ナデ調整によるものとで2分類する。

I類(第8図12・13)：12は、焼き歪みがあるが、口径28.8cm、盤高3.6~4.1cmほどを測る。盤の内面に同心円状の突帯が施されている。突帯は1~1.5mm高で、口縁部から底部にかかるところまではば等間隔、底部では不整である。体部は幾分ふくらみ氣味に引き上げられ、口縁部は一旦引き締めた後肥厚させて丸くまとめている。13は台高2.9cm、台端部径12.3cm、12の台部である。台の中ほどでやや広く外側に、端部は尖り氣味で僅かに上がる。胎土は精良だが、焼成不良で軟質、内外面灰白色を呈す。

II類(第8図14・15)：15は盤の破片である。内面は滑らかな横ナデの調整で、口縁端部は斜め下方へ僅かに折り返し、上端部に丸味をついている。14の台部は端部径13.5cmを測り、15同様に胎土精良だが焼成不十分で軟質、内外面灰白色を呈すもので、15と同一個体であることを想定させる。端部はね上がって尖る。

壺口頸部(第8図16~18)：16は口径5.2cm、口頸部長9.8cm、頸基部径4.2cmを測り、口縁部の広がりはさほどではない。17・18はかなり広がりをみせ、各々口径7.6cm、8.4cmである。16・17の頸部中ほどには2条の平行沈線があり、ともに口縁部にかけては次第に薄くなって外反し、端部は尖り氣味、18は薄手で、口縁部が外側でやや肥厚し、端部に丸味をついている。いずれも胎土に砂粒を少量含み、焼成良好で堅緻である。

平瓶(第8図19)：器高15.3cm、口径6.5cm、胴部最大径15cmを測る。体部は断面梢円形を

呈し、口頸部を一方側に寄せてつけている。全体に薄手の作りで、頸接合部で肥厚する。口縁部にかけて内彎気味に外反し、端部は斜めにカットされた平坦面をなす。肩部にカキ目が施され、肩～底部にかけてヘラ削りによる弱い稜線が5～6本残る。底部に坏蓋片が固着する。胎土に砂粒を多く少量含み、外面上半部と頸部の内面に灰緑色自然釉がかなり厚く付着し、4ヶ所ほど流出した釉が玉状で残る。

高台付壺（第9図1～4）：1・4は高台付の壺である。施文や調整に相違をみると、全体的には類似する。1は器高20.7cm、口径13.5cm、胴部最大径17.5cm、台底部径11.6cmを測る。体部は丸く形造られ、腰らんだ胴部に9～14mm間隔で二条の平行沈線がめぐり、その間に櫛描きの斜行文がつけられている。肩～胴部にカキ目調整が施され、底部にかけてはヘラ削りによる弱い稜線が入る。口頸部は一旦肩から直に立って外開し、さらに角度をかえて引き上げ端部を丸くまとめている。頸部に縱方向の刷毛目が見られ、傾斜変換部に沈線が入る。台部は中ほどでやや段づきをつけて外方に引き出し、端部に丸味をついている。4は胴部最大径16.2cmを測るところに弱い稜線が入り、その内面は肩・胴部を区分するように器壁の引きぬめがある。底部にかけて次第に肥厚するが、特に底部で1.8cm前後となる。台部は1より1.6cmほど低いが端部径は同程度であり、形状も似通っている。1・4とも青灰色を呈し、4の外面上半部に灰緑色自然釉が付着する。

2・3は長頸壺の可能性も考える。2は胴部最大径20.8cmを測る大形品の体部であり、他と趣を異にする器形である。肩・胴部の境に2条の平行沈線が入り、上位の沈線から派生したかたちでヘラ描きの斜行文が施され、下位の沈線から下方約2cm巾でカキ目調整である。口頸部の接合には、頸基部を体部の内側に宛がっている。内面底部にかかるところに指頭痕跡が残る。3の体部は丸く形造られていたものであろう。胴部最大径は14.2cmで、肩部の中ほどに8mm間隔で2条の平行沈線が入り、その間にヘラ描きの斜行文が施されている。2・3とも焼成良好で、外面に薄く灰緑色自然釉が付着する。

種

口径の大小、頸部の長短はあるが、口縁部の形態によって3分類する。

I類（第9図5）：口縁部は、斜め下方に短く折り曲げ、上下端を尖り氣味に作ったものである。5は口径36.8cm、頸部高14.5cmの大形壺口頸部で、頸上部に平行沈線で区画されたヘラ描きの連続文が時計回りで施されている。器壁は頸基部で厚く、上半部ではほぼ一様の厚さである。内外面に灰緑色～暗灰緑色自然釉がかなり顯著に付着する。4は口径24.9cm、頸部高4.7cmで一回り小形であり、口頸部はかなり大きく外反する。肩部との境に帯状の脛らみがあり、肩部は直線的に下がる。内外面青灰色を呈し、灰緑色自然釉が付着する。

II類（第9図6・7）：口縁部を頸部の引き上げから一旦段づかせ、断面梯形状に仕上げている。3は口径18cm、頸部高3.7cmを測り、口頸部の外反は緩やかである。肩部との境に細い沈線が入り、肩～胴部に丸味を帯びて移行する。肩部の外面は平行叩きの上にカキ目調整し、内面には同心円叩き目が施されている。6は口径22.5cm、頸部高4.3cmで、口頸部・肩部が直線的で断面くの字形を呈す。肩部の外面は縱方向の叩き目の上にカキ目調整をし、内面には同心円叩

き目が施されている。7は破片である。口縁部は、一旦段づかせて長く引き上げ、上端を尖り気味に仕上げている。段づき部の外面には浅い沈線があり、これより下方 2.8 cmにも沈線がめぐり、その間にヘラ書きの連続文が左回りに施されている。1も口縁下端部の段づきが明瞭で、さらに 4 mm巾で窪ませて縁どりしている。口径 22.6 cm、頸部高 4.5 cm である。口頸部～肩部にかけて断面くの字形であるが、境は角張らない。

いずれも、焼成良好で青灰色～灰色を呈し、7・1・3 の外面及び頸部内面に灰緑色自然釉がかなり厚く付着する。

Ⅲ類（第10図2）：口縁部を丸く仕上げている。口径 21.7 cm、頸部高 2.6 cm で、頸中ほどに一条沈線がめぐり、肩部はかなり強い傾斜で直線的に下がる。肩部の外面は、平行叩き目の上にカキ目調整をし、内面には同心円叩き目が施されている。胎土に砂粒を少量含み、内外面灰褐色を呈する。

ロ 土師器

壺（第10図5・6）：5は口縁部を欠くが、口径 20 cm、頸部高 4.2 cm と推測する。頸部と肩部の境に弱い棱があり、肩部の傾斜が急である。肩部内面に粗い刷毛状の工具で調整した跡が残る。6は口径 15.9 cm、頸部高 2 cm で、一回り小形のものである。頸部と肩部の境に弱い棱があり、断面くの字形を呈す。5・6とも胎土に砂粒を少量含み、焼成がやや甘く軟質で、内外面は黄褐色である。

瓢把手（第10図7・8）：7の把手部は 6.5 cm 長で、断面が不整な梢円形をなす。基部～先端部にかけてかなり急な角度、先端部は丸味をついている。全面ヘラによる丁寧なナダ調整である。8は把手部 6 cm 長、先端部にかけて著しく細身となる。接合面に対し基部のひき延しが広く、厚い。7・8とも焼成不良で軟質、7は淡褐色、8は赤褐色を呈する。

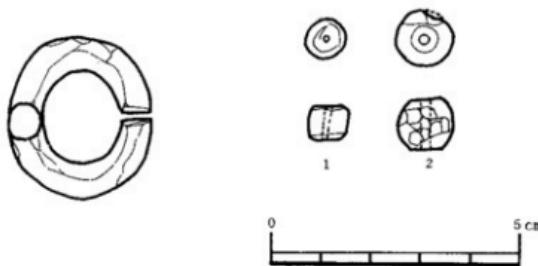
土錠支脚（第10図9）：先端部を欠く、脚は円棒状で、中ほどで径 3 cm を測る。先端部にかけて次第に細身、内弯する。胎土は粗いが焼成良好で、硬質である。赤褐色を呈する。

ハ 装身具

耳環（第11図）：径 3.3 × 2.7 cm、断面ほぼ円形で径 7 mm を測る。中実の銅胎に金箔を置いたものだが、外側部は剥落して緑錆を生じている。

トンボ玉（第11図2）：径 11.5 mm、厚さ 10 mm、孔径 2 mm を測り、上下に径 5 ~ 6 mm の平坦面をもつ。うす緑・スカイブルー・紺色のガラス材が混合する。

ガラス丸玉（第11図1）：径 8 mm、厚さ 7 mm で、縦断面隅丸方形形状を呈し、十分丸玉に整形されていない。孔径 1 mm、上下の平坦面に対しやや斜孔である。紺碧色。



第11図 5号墳出土耳環・玉類

2. 黒島林第6号墳

本墳は、5号墳と7号墳のほぼ中間の尾根筋に位置し、5号墳とは略5mの高差である。ここでは尾根筋がかなり広く、緩やかで、東西側の傾斜も少ない。5号墳に比べて立地は良いと言えようが、反面において、主体部の墓塚造りでは掘り下げが深くならざるを得ず、また際立った墳丘をなすことも他易くはない。こうした事情にもよるのか、現墳丘は、周辺の地形から見て際立った高まりを有するものではない。

本墳でも頂部に $1.5 \times 1 \times 0.7$ mほどの盗掘坑があった。しかし、これが小規模であったし、開掘による墳形の大きな崩れも見受けられなかったので、内部主体の盗掘破壊はないものと考えられ、いわゆる未掘の古墳としての期待があった。そして從来、その立地や外觀上から、周辺古墳同様に尾根に直交し略南西に開口する横穴式石室を想定し、5号墳よりは見かけ上の規模が小さく、内容を異にするものと考えてきた。

調査は、まず墳丘のはば中心に基点を求め、略南西方向に主軸線E-Wトレントと基点で直交するS-Nトレントを設けた。しかし、その後玄室から築道部の側壁検出によって主軸線の変更を余儀なくされ、新たにA-B主軸線を設けて調査を進めた。調査の方法や手順は、5号墳の場合とはほぼ同様である。

(1) 墳丘（第12図）

墳丘は、見た目では径10m、高さ1mほどのものである。なるほど、地形測量によれば、標高62mの等高線が通るところで傾斜の変換があり、それより上位3本の等高線は、ほぼ円形の高まりを書いて徑11m、高さ80cmほどの円墳となり、見た目と同程度の規模を示している。

その後、S-E-Nトレントにおいて地山整形による溝状部が認められた。各溝状部は、玄室中点から削って7.5～8mの位置にあり、そのレベルはS-E溝状部が標高61.1m、N溝状

部で約70cm低い。言うまでもなく、溝状部は墳壠地点を明示するものであり、本墳は、標高61m前後を墳壠レベルとして、径16m、現高2mほどの円墳であることを知った。

これによれば、玄室の中心がほぼ墳丘の中心に重なるプランをなすわけであるが、現墳形では主体部が北側に偏在しているかのように見える。このことは、北側部の盛土流失で旧状が変形したためではなく、本来、墳頂部が墳丘の中心を南側寄りにはずれて築成されたためではなかろうか。

墳丘の築成については、大づかみに、次のような経過を考える。

まず、尾根筋の旧表土を削り取り、傾斜の少ない地山面を造る。古墳のプランを念頭に墳壠部を両き、主体部の墓底を設定する。次いで、南側の尾根筋高い方の墳壠予定場所をかなりな巾で掘り下げて溝状部を造る。これに合わせて、東側、北側の墳壠部も溝状部で区分される。溝状部は西側前庭部に向けて開口するプランで、自然斜面に消える。

このような溝状部の掘り下げや墓底造りで得た土は墳丘の盛土に使用する。そして、主体部の構築に応じて、花崗土に黒褐色粘質土を互層状に混じえた版築土層を重ねて墳丘を形成する。

では、こうした経過を各トレンチにおいて観察しよう。

Sトレンチでは、傾斜の少ない地山面を、玄室中点から10m前後あたりより巾3~4m、深さ70~80cmほど掘り下げて溝状部を造っている。墳丘基底面が平坦にちかいので、花崗土と黒褐色粘質土の互層状盛土層は平行状となっている。最上層の黒褐色粘質土層の傾きは、墳頂部に向う墳丘傾斜を示すものであり、これをたどって原墳頂部を現状より40~50cm高と推定する。

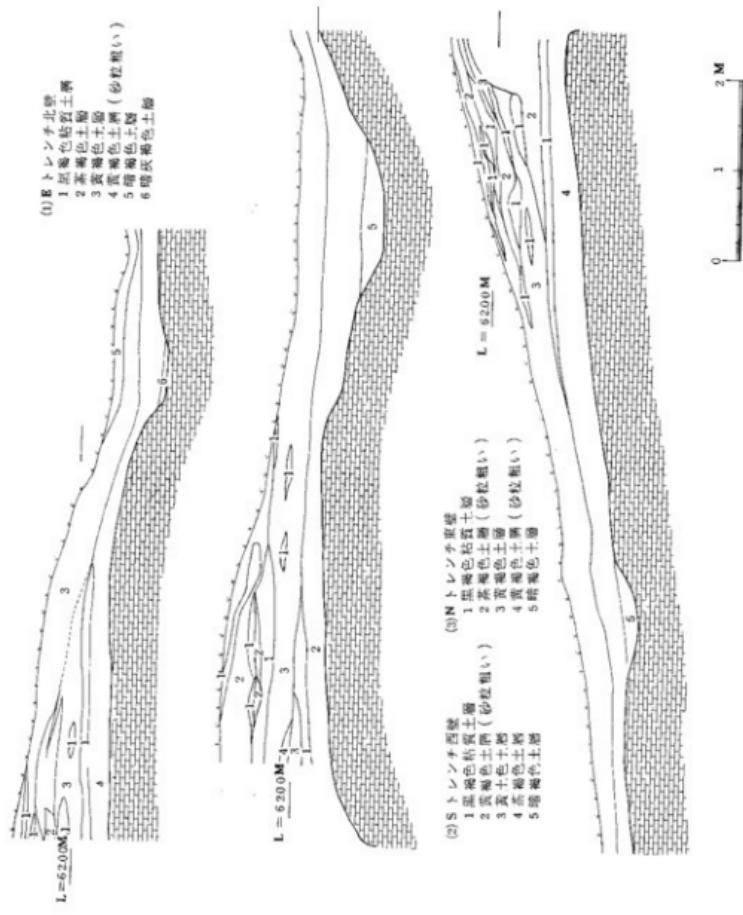
Eトレンチでは、尾根筋よりやや東西の緩斜面をなす地山面を30cmほど掘り下げて溝状部を造り、南側墳壠部にレベルを合わせている。ここでも墳丘基底面がほぼ平坦であるため、花崗土と黒褐色粘質土の互層状盛土層は平行状となっている。そして、各層の外端部をたどる線は溝状部内側法面に統一るもので、墳丘の原状を物語っている。

Nトレンチでは、緩下降する尾根筋地山面を僅かに20cmばかり掘り下げて溝状部を造り、墳壠部を画している。盛土は、まず30~35cm厚の花崗土を外側に厚く敷き、厚さ10cm前後の黒褐色粘質土層を重ねて平坦にちかい基底部をなし、それより上部は黒褐色粘質土を4層ほど混入させて盛り固めている。

溝状部については、SW区(墳丘南西1/4区画)・SE区(南東1/4区画)トレンチにおいても認められた。SWトレンチでは、巾約180cm、深さ20~25cmの浅い溝状部が東西方向に続き谷斜面向うものである。SEトレンチでは、ちょうど墳壠部を想定する地点において、巾1.2m、深さ25~26cmの溝状部を検出した。

このような溝状部の全体について言えば、N~E~Sトレンチの墳壠を巡って、SW区では墓道部に並行状で谷斜面向う、いわゆる馬蹄状溝の形状を呈している。ただ、S~SW区に対応するN~NW区における溝状部の在り方については未確認である。

墓道は、墓道入口部からはじまる純いU字状溝であるが、石室主軸線より7度ほど北にカーブしている。その巾は墓道入口部で1.22m、中ほどでやや広がるが、PAより10.5~11mにかけ



第12図 6号横断面図

ては半分ほどの巾狭となり、11.5mから再び次第に巾を広げ、約1.5mで自然斜面に消えている。この間、底面は次第に下って、PAより11m地点では比高27cmを測り、11.5m地点からは14~16cm低下した梢円状の窪み部を伴う。おそらく、形状の変化が明瞭なPAより11m前後のところが前庭部と区分するところであり、墓道は3.5~4mほどであろうか。

墓塚については、各トレンチ・主体部掘り下げの所見によって規模・形態を考慮する。SNトレンチで検出した墓塚の肩巾は約3.1mで、両肩部の高差は少ない。南側で1.4m、北側で1.2mほど掘り下げその底面を水平位に保っている。底面巾が約2.6mなので、断面は逆梯形状を呈す。東西側では、東側で1.5mほどの掘り下げとなっており、PAより7m点までの底面は僅かに下がる程度である。底面は標高60.1mを測り、想定した原墳頂との比高差は3~32mとなる。墓塚の平面は、玄室部ではほぼ長方形をなすが、羨道部にかけて約1m巾狭となる。

(2) 石室(第13~16図)

本墳の内部主体は主軸線N41°Eにとり、尾根に直交して略南西に開口する両袖形の横穴式石室である。

調査前ににおいて、墳頂部に小規模な盗掘坑があったが、内部主体の盗掘破壊はないものと考えられる未掘古墳としての期待があった。しかし、掘り下げを進めると、盛土層ではない、明らかに開掘後の埋土層が見られ、盛土に比べ軟質の方形状埋土部分は恰も以前の開掘を物語るようであり、当初の期待は間もなく崩れた。

石室の遺構は、天井石がすべてなく、側壁も玄室で大半を失し、2~3段の積み石が残るだけである。羨道の両壁は一部を欠くが、7~8段積みで残るところは原状にちかいと思われる。天井石がすべてない――古墳の周辺に放り出されたものもなければ、掘り下げ中にその転・落石も見当らなかった、ということは、本来架構されなかつたのではないかとさえ思える状況であるが、羨道部では確かに天井石の架構が考えるだけに、まことに奇妙な感がする。ともかく、遺構の現状からは、如何にも上手な仕業によって天井石や側壁が抜き取られたとするのが妥当ではなかろうか。

石室は、細長の玄室にはば同長の羨道部を付し、6.75mを測る。使用石材は、すべて砂岩の転石である。

ところで、本石室において特徴的なものは、玄室奥部のつくりや床面の施設、羨道部の仕切石の所在等である。以下、石室各部を観察する。

玄室は、主軸線で長さ3.05m、巾は奥巾1.7m、中央最大1.8m、前巾1.4mを測り、側壁根石の配置がやや内彎するプランであるため幾分割張り状である。しかし、平面では、むしろ中央部から玄門寄りに次第に巾狭となるプランが注意される。

奥壁の2石とそれに接合する両側壁は、いずれも大形平板な用石を縱長に用い、15~20cmの埋設で互に突き合わせて玄室奥部の壁面をなしている。4石の上端はおおまかに揃えているが、各々の上辺部は不整形で、さらに厚さ20~25cmほどの板石であるため、背後に十分な控え積みをしたとしても、上部への石積みは困難であろう。ところが、4石の背後には、控え積み石もなければ、特に裏どめのため工夫した盛土も認められない。このため、玄室奥壁の構築が玄室

中において他所と顕著に異なり注目されるわけだが、上部の石積みについては疑問が残る。

側壁根石の配置は、奥の平板石に続けて北側で2石、南側で4石を突き合わせて同長としている。いずれも根石に通った大形石で、横長に据えて安定させているが、中でも北側の1石は1.45mを測る長大なものである。根石上の積み石は、両側壁とも2~3段の小口積みが残存し、床面より40~60cmの壁面をなしている。積み石の間隙には小形の細長石を充填し、玄門石に接合するところも袖部に留意した積み方で、全体に小形の石材を手実に段積みしたものと言えよう。

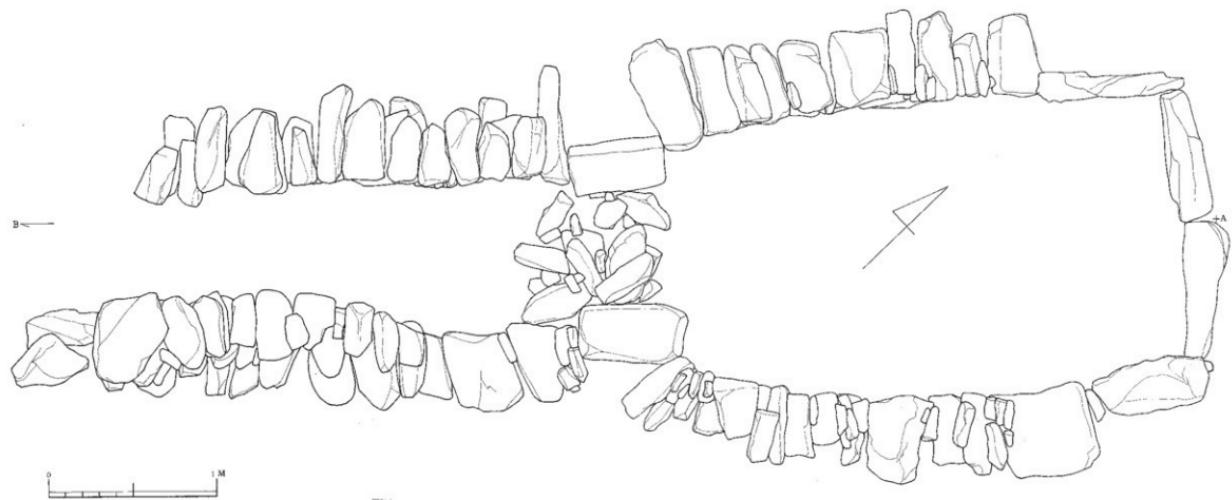
ところで、両側壁とも玄門寄りでは玄門石上端に積み石のレベルを揃えようとしたふうにも見受けられる。これは、あくまでも現状でそのように見受けられるだけであるが、両玄門石と玄室奥部の4石のレベルがほぼ揃い、しかも4石の上部には石積みが困難であるとすれば、本来両側壁は玄門及び奥部に高さを合わせて床面上70cm前後のものであったのだろうか。これでは、とうてい天井石の架構は考えられない。

ここで、再び天井石の架構について考慮せざるを得ない。その何点かをまとめてみよう。

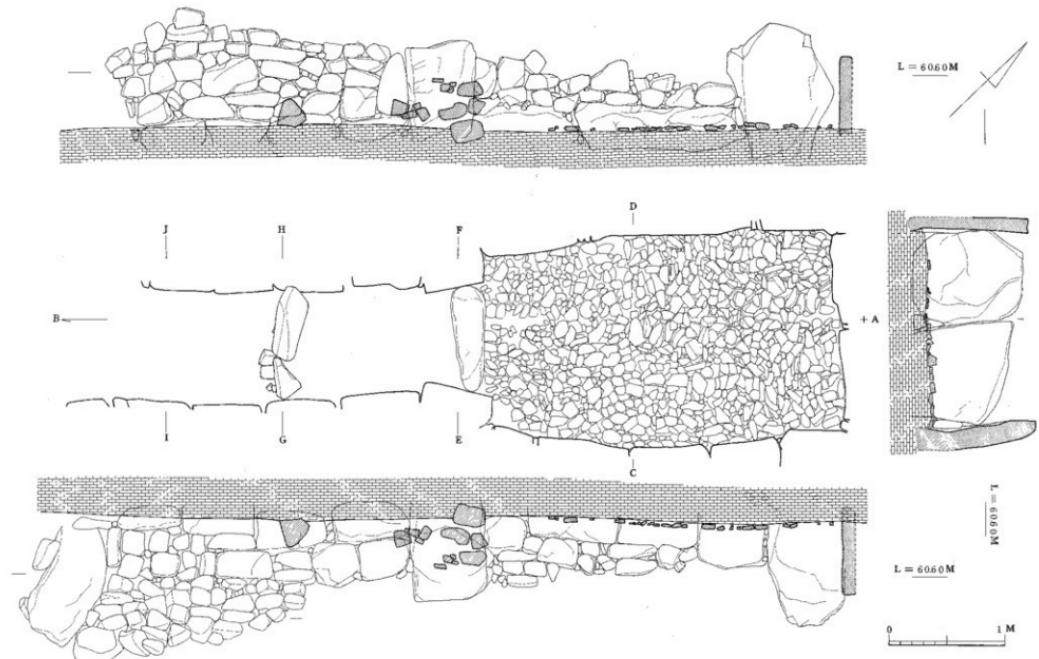
(イ) 墓塚底面と原墳頂部との比高差は約3mであり内部主体として巾1.8m、高さ2m前後の玄室の存在を想定するのは、ごく当然のことであろう。(ロ) 横穴式石室のもつ機能上必要な差道部が、ときに形骸化して装飾的に付されたりすることはある。しかし、本差道部の遺構は、構造的な意味を十分に備えたものであり、当然本体である玄室に付して機能していたものである。すなわち、玄室は、この差道部を十分機能させ得る構築物、追葬可能ないしむろだったわけである。玄門部の閉塞施設の遺存も、そのことを意味している。(ハ) 玄室より出土の耳環9個は、3セット関係以上であり、出土土器にも時期差が認められ、本墳における数次の追葬を考えられる。まさか、追葬時毎に墳頂部から開掘したものでもない。ましてや、追葬は横穴式石室のもつ特有の機能である。本墳の内部主体が通常の横穴式石室の形態をとるものであったことは想像に難くない。このように考慮してみて、やはり、相当占い以前に如何にも上手な仕業によって天井石や側壁が抜き取られたとみることが妥当であるとした。

玄門には $60 \times 80 \times 30$ cm大の形状の以通った板状石を対応させて配し、両側で24cm~25cmの袖部をつくっている。両玄門石の埋設は10~15cm、今5~10度内傾しているのは本来のものであろう。玄門の巾は差道に向って20cmほど狭くなり、差道側では僅かに袖をなすかたちである。玄室側では、両玄門石に間隙なく宛がった $90 \times 28 \times 17$ cm大の踏み込み石が埋設されている。その内側面は、両袖部の線に合わせて直になり、明確に玄室の内外を区分している。そして、踏み込み石の上部には2~3段の乱積み状態で、閉塞用の数石が残存していた。それらはちょうど玄門部の前後を画するように積まれたもので、現状では床面より60cm高であった。この閉塞石の下部及び間隙には、玄室床面に相応する砂利土が詰っていた。

玄室の床面施設については、擾乱によって不明瞭な箇所もあるが、大体3層序に見分けられる。上層は墓塚底面より12~15cmを測り、砂利土からなる床面である。中間には、やや大き目の砂利面をはさんで、下層は同大の礫を敷き詰めている。主軸線北側部は礫面を取り除き墓塚底面を検出したが、排水施設は認められなかった。

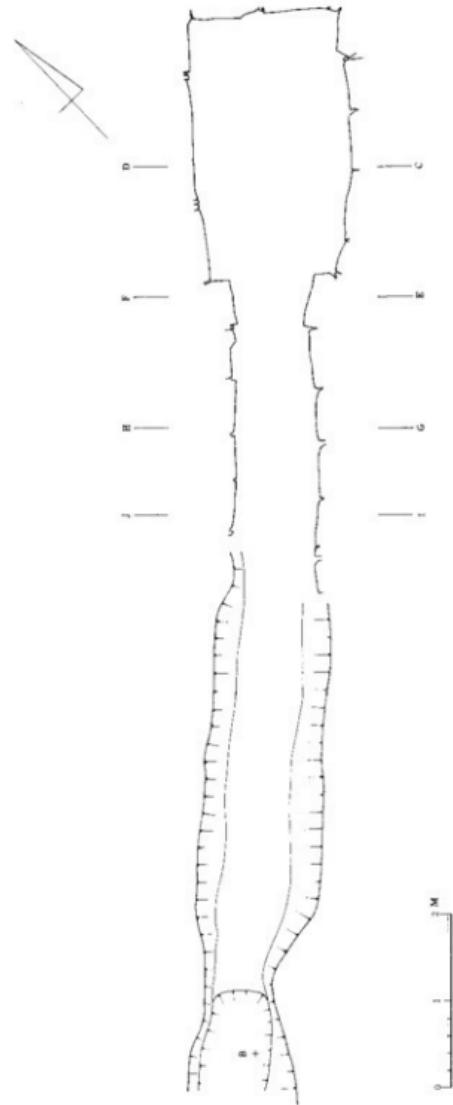


第13図 8号墳石室上部圖



第14図 6号墳石室実測図

第15回 6号填石型床面プラン



さて、羨道部は、南側羨門石まで約3.1m長である。玄門から85cm地点に羨道部を前後に2分する仕切石が配置されている。それは2石横列で突き合わせ、下部に詰め石を充て上面のレベルを揃えている。踏み込み石から仕切石まで1.2mの間隔、床面はほぼ平坦で、追葬時の敷設であろう。砂利土が10cm厚で残存していた。仕切石から羨道入口部にかけては、床面が次第に下降して墓道に向う。床面の巾は前・後部ではほとんど変化なく、95~98cmほどである。

南側の羨門石は50×110×20cm大の板状石で、縱長に据えた背後や下部に控え積み、詰め石を用いて固定しているが、側壁の押圧で西横に傾いている。北側には相対する羨門石ではなく、その痕跡も認められなかった。しかし、側壁前端部の石積みの状況が南側羨門石に添わせた石積みに似通っているところなど、此側にも羨門石が存在したことを想像させる。また、両壁根石の配置が、ともに4石を用いて突き合わせほぼ同長となっているのも、本来北側にも羨門石が存在していたことを示唆しているようだ。

羨道の両壁は、下部に大形石を用い、上部に小形石を積み上げており、一見壁面のみに留意した乱積み状態のようだが、おおまかには各段の積み石を揃えている。南側壁は、玄門から中ほどまでの2段目に大形石の横口積みが見られ、それより羨門にかけて7~8段の小口積みである。羨門石添いでは、その東側面のカーブに合わせた積み石で間隙を少なくしている。北側壁では、南側壁より横口の積み石が多く壁面が安定している。入口部に近いところで7段の積み石、それより玄門部に向けて次第に積み石が下がる。玄門石と接合するところで、根石の上に大形石の小口面を縱長にして積んでいるのは目を引く。

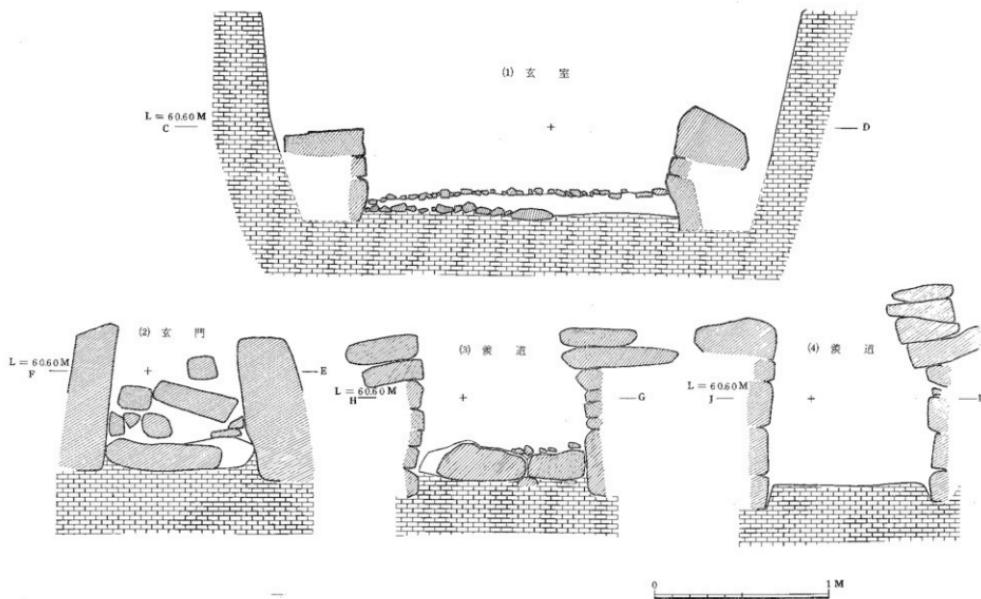
両壁とも現状では入口部近くで最高所を見て、床面より南側が1.2m、北側が1.1mほどを測る。石積みの持ち送り状況については、南側上部がかなり内傾し、北側は後方に反り気味であるため、確實には把握し難い。比較的原状にちかいと思われる仕切石近辺の南側では、床面上86cmの上・下部で15cm差となる持ち送りが見られる。

(3) 出土遺物

① 出土状況

本墳は、古く既に盜掘破壊を受けているにもかかわらず、須恵器・土師器の他に装身具・工具・馬具・武器等と多様な遺物の出土があって注目される。それらは、玄室・羨道・墓道及び前庭部・S W区トレンチの溝状部において出土した。

玄室における遺物の出土は、大づかみに2区分される。それは、まず砂利面に堆積した灰色泥土中や盗掘時に中央部へ搔き寄せられた砂利面から出土したもので、次いで、床面及びその下部のやや大き目の砂利間から出土したものであり、一部は最下部の礫面で検出したものもある。前者では、須恵器が大半を占め、完形坏蓋(第17図22)をはじめ坏身(第17図14)・坏蓋(第17図^{17・18}23)・高坏(第17図27)・短頸壺(第18図5・7)・台付碗(第17図13)等が両袖部及び玄門寄りの部分で認められ、確かに搅乱されてはいるが、この部分で須恵器の副葬が行われたことを暗示するようだ。次いで鉄器類が20数点、鐵錫片が多い。そして、3個の耳環が出土した。1個(第24図7)は南側縁寄りの中央部であるが、2個(第24図1・8)は中央や北側部で7点の玉類に近接し、後述の床面出土の耳環・玉類にも相応した場所にあり、本来の位置をそ



第16図 6号墳石室横断面図

う大きく移動していないようだ。土師器は4片、うち2片が丹塗りの盤片（第18図12）である。後者では、土器は数片にすぎず、多数の玉類・鉄器類を数える。玉類（第24図）は土玉・ガラス玉・管玉・切子玉・琥珀玉など179個であり、ほとんどが中央部から奥壁寄りで出土し特にその北側部（北東1/4区域ほど）に130余個が集中していた。これだけ玉類が集中的に出土したことや、径30cmほどの円形状に人骨の痕跡が認められること、また耳環の出土状況などからすれば、この奥半部で何次かの追葬が行われたことを推察させる。鉄器類の出土は主軸線北側部に多く、袖部周辺に密である。中でも、鎌（第21図40～43）・斧（第21図36～39）・鑿（第21図34）・馬具（第23図1～4）・刀（第20図2～4）・鉢（第20図1）などは他に一部が点在するが、副葬の原位置を北側袖部に求めてよい出土状況である。鉄刀子（第20図9～15）は11点中完形にちかい2点を含めて6点が奥半部の両側壁寄りで出土したが、それぞれ原位置にあるものかどうかは判断しかねる。鉄鏡（第20・21図）は北側袖部から中央部にかけて多く出土し、約50点、多種にわたるが、各種別による出土場所のまとめは認められない。耳環は、南側袖部で2個（第24図3・4）、北東隅部で1個（第24図2）、さらに中央北部で3個（第24図5・6・9）の計6個が出土し、前記の3個を加えて、3セット関係と3個の組み合わせとなる。なお、南西隅部の隙間で上部より沈んだと思われる滑石製紡錘車が3個近接して出土した。1個（第22図1）は円板形、2個は（第22図3・5）は截頭円錐形である。

玄門部の閉塞石下では、須恵器・土師器數片の他、馬具・鉄鏡数点が出土した。

羨道部における遺物の出土は、埋土中、仕切石後部の砂利面、仕切石前部の床面の3区分で把握する。埋土中では、上部で須恵器10数点が出土し、环身（第17図3）・坏蓋（第17図16）・直口壺（第18図10）などの器形が判明した。下部でも須恵器片が大半を占め、玄門寄りで提瓶（第18図4）が出土した他は仕切石近辺で集中的である。そのうち玄門寄りの下位で出土したものと接合し、壺（第18図8）が復元できた。なお、羨門部で土師器の完形壺（第18図11）が出土している。原状を保つような出土状態で追葬のものと考えるが、同レベルでは近辺に遺物を見ない。仕切石後部の床面からは鉄鏡片数点と須恵器の完形品4点及び数片が出土した。完形品4点はいずれも环身で、1点（第17図6）は崩れ込んだ閉塞石の上にうつぶせでかかり、他3点（第17図7・11・12）は落ち込んだ状態で、しかも内2点が重なって出土した。仕切石前部の床面では、仕切石前において須恵器の出土がまとまりをみて、完形の坏蓋2点（第17図20・26）や大形壺（第19図1）などが出土した。大形壺は明らかに原位置にあり、环身4点もほぼ原位置を保つものとしてよいだろう。こうした仕切石の前・後部における遺物の出土状況は、前部のものが後部のものに次ぐ時期の追葬によるものであることを示唆している。

羨道の埋土中からは、須恵器・土師器片が多量に出土した。これは、追葬時に玄室や羨道で整理され、掻き出されたものであろうか。須恵器の破片中より、环身（第17図2）・坏蓋（第17図15・18）・高环（第18図1～3）・高坏蓋（第17図24）・短頸壺（第18図6）・中形壺（第18図9）などの器形が判明した。なお、この部分でも須恵器の完形品が4点出土している。3点は南側羨門前の盛土肩状部からであり、そこにあった2石の河原石に挟まれた状態で环身（第17図8）・坏蓋（第17図21）のセットが、また落ち肩にかかるところにより环身（第17図9）が出土し

た。この3点は原位置を保つものであり、同時期の供獻によるものであろう。もう一点は、前庭部にかかるところの埋土下部から出土した坏身（第17図14）である。

墓道から前庭部にかかる北側肩部沿いの埋土上部で須恵器高环の坏部（第17図25）・完形の坏身（第17図5）が並んで出土したが、これは偶然の状態であろう。墓道北側肩状部と前庭部から出土した2個の滑石製纺錘車（第22図2・4）も、各々玄室出土の3個の中に同タイプを見い出すことができ、追跡時に掘り出されて現地点から出土したものと推測する。前庭部では2ヶ所ほどに、須恵器片が各10数点ずつたまて出土したが、そのいくつかは墓道から出土したものとの接合ができた。

ところで、S W区 レンチの溝状部では須恵器の甕体部片が10数点出土したが、器形の判る復元はできなかった。ただ、その形状や調整跡の観察では、2～3個体のものに区分される。

② 遺 物

イ 須恵器

坏 身

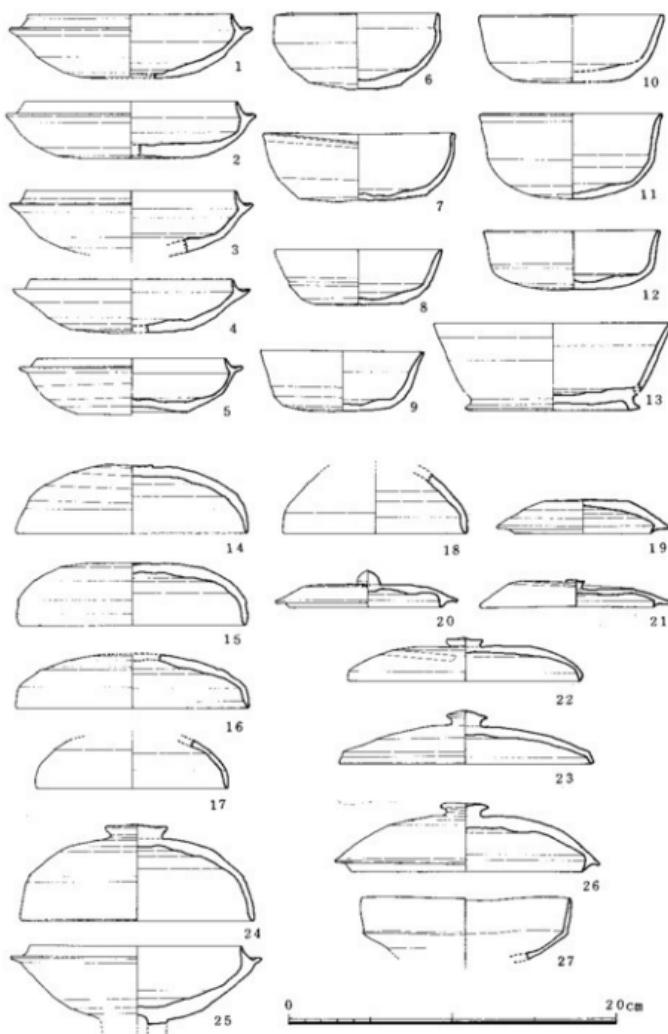
口縁部に受部のつくもの、つかないものとで2分類し、高台付のものをⅢ類とした。

I類（第17図1～5）：口縁部に受部がつく。1～4は口径12.4～12.9cmの間を割り、5が11.5cmで一回り小形品である。器高は2・4が3.3～3.5cmで低く扁平化し、他は3.9～4cmで同程度である。いずれも、体部～受部にかけて薄い作りであるが、5は目立って薄く脆弱に見える。端部はやや引き上げて、4を除いて丸味を帯びる。立ち上がりは1～3が9mm、4・5が6～7mmで、一様に内傾して尖り気味。1・3の先端部はやや角度をかえて立つ。底部はヘラ削りによってほぼ平坦な面をなすが、5は焼き歪みが大きく中央部で窪む。全体に体部との境で角張らない。2は焼成が甘くやや軟質、4・5は良好で外面に灰緑色自然釉が付着する。

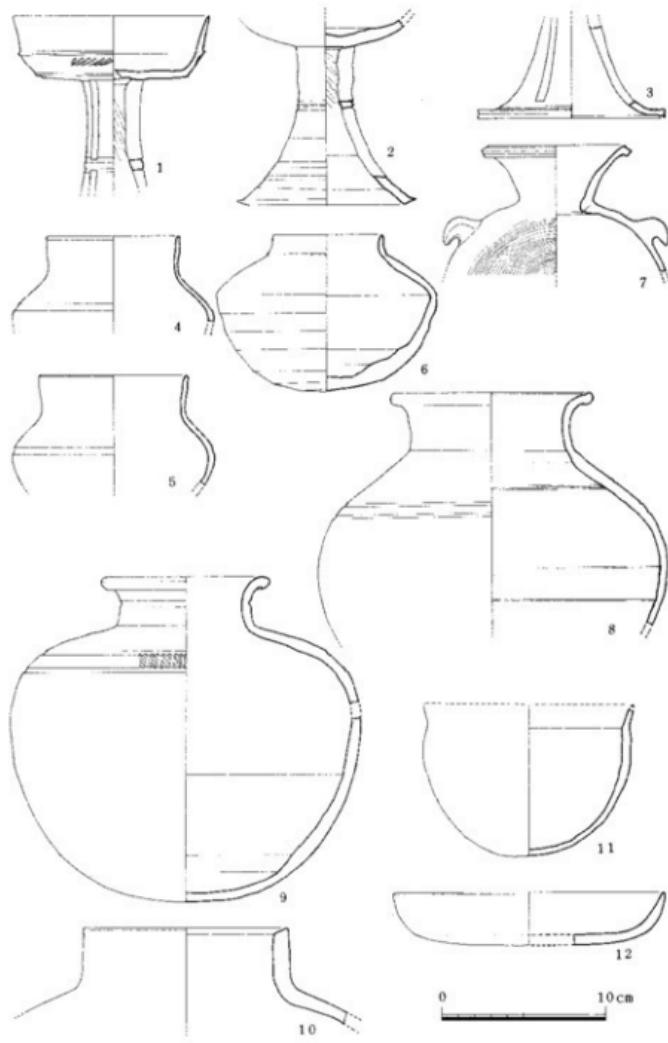
II類：受部のつかないものであるが、底部の調整がヘラ切りとヘラ削りの違いにより区分する。

II a類（第17図6・7）：底部はヘラ切りのままである。6は口径10cm、器高4.6cm、口縁部にかけては直に立ち、内面で幾分肥厚させ、端部に丸味をつけている。7は薄手のつくりで、口縁部の焼き歪みが大きい。底部は広く平坦、内縁気味に引き上げて、口縁端部を丸くまとめている。6は胎土に砂粒を多く含み、焼成が甘く軟質、7は胎土・焼成とも良好である。

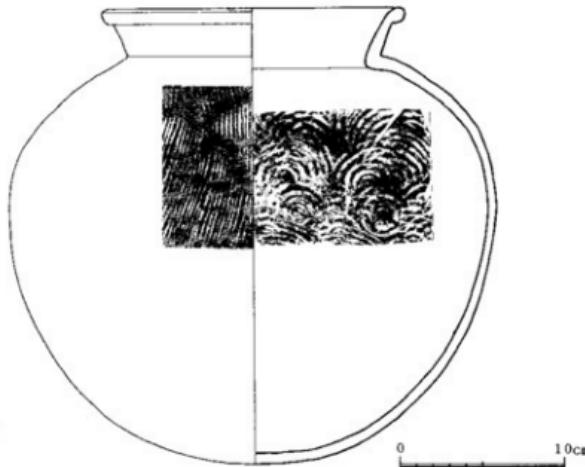
II b類（第17図8～12）：底部をヘラ削りで調整している。8・9・10・12は、底部の広い同類形を示す。特に8・9・10は口径10～10.7cm、器高3.4～3.7cmの間を割り、大小差もさほどなく、体部の下位には器形の引き縫いで生じたと思われる浅い沈線が巡る。10は口径11.3cm、器高4.1cmと復元測定した。かなり頑丈な作りに見える。11は口径11.1cm、器高5.2cm、全体に薄手の作りで丸い椀形、他とやや趣を異にする。いずれも体部～口縁部にかけては、概して直線的に外開し、9・11・12などは端部でさらに外反する形態である。端部は9が尖り気味、他は丸味をつけた仕上げである。なお、9の底部には長さ2.6cmのヘラ記号沈線が刻まれている。どれも青灰色～灰色を呈し、胎土に砂粒を少量含む。8・9の外面には、暗灰緑色～灰黒色自然釉が薄く付着する。



第17图 6号填出土器(1)



第18図 6号墳出土須恵器(2), 土師器



第19図 6号墳出土須恵器実測図

Ⅲ類（第17図13）：高台村の环である。环・台部を接合復元できないが、口径14.4cm、台部高4～6mmで、器高5.3cmと推定する。环部は口縁部にかけて一様の厚さで直線的に外反し、端部を尖り気味にしている。内面底部のほとんど全面に仕上げナデを施す。高台はやや高い貼付けで、端部を僅かにはね上げている。胎土に細粒をやや含み、焼成良好で堅緻、青灰色を呈す。

坏 蓋

蓋につまみ、口縁部内面のかえりがつくもの、つかないものとで3分類する。

I類：つまみ、内面のかえりともにつかない。形態によって3区分する。

I a類（第17図14～16）：口径13.7～14.2cm、器高3.3～4.1cmの間を測る。天井部は全面へラ削りの調整である。14は天井部が丸味を帯び、体部との境で浅い沈線があり、口縁部は幾分外反して、端部を尖り気味にしている。15は天井部が平坦で広くなり、体部との境ではやや角張りをつけ、口縁部は内彎気味、端部に丸味をつけている。16も天井部・体部の境で傾斜を変換させ、口縁部を僅かに外反させている。端部は内面で薄くし、尖り気味にしている。14は焼成甘くやや軟質、15・16は焼成良好で青灰色を呈し堅緻である。

I b類（第17図17）：口径11.7cm、小形・薄手の作り、天井部を欠く。体部との境でやや傾斜を変換させ、口縁部を内彎気味に外反させている。端部は、内面を僅かに外方に引き出して

尖り気味である。胎土に細粒を少量含み、青灰色～暗灰色を呈す。

I c 類（第17図18）：口径 11.2 cm, 天井部を欠くが体部への傾斜がかなり急であり、器高 4.5 cm ほどと推測する。天井部・体部の境でやや傾斜が変換する。口縁端部は丸味をもつ。焼成甘くやや軟質、胎土に細粒をごく少量含む。

II 類：内面のかえりをもつものであるが、つまみの有無及びその形状によって 3 区分する。

II a 類（第17図19）：器高 2.1 cm, かえり径 8.3 cm。天井部は平坦面をなすが、つまみはない。体部はかなりな傾斜で直線的に下がり、端部は尖り気味、身受け部は平坦である。かえりは短く直に内傾して尖る。胎土・焼成とも良好、外面に自然釉剥落による肌荒れ状があり、端部の一部に灰緑色自然釉が帶状で残る。

II b 類（第17図20）：宝珠形のつまみをもつ。器高 2.3 cm, かえり径 9.3 cm。天井部はヘラ削りの上に横ナデ調整をし、広く平坦である。体部は直線的に下がり、端部は細身だが丸味をつけ、受部をほぼ平坦にしている。かえりは 4 mm 高、厚手の作りで安定感がある。胎土に砂粒を少量含み、青灰色を呈す。

II c 類（第17図21）：つまみは頂部中央が僅かに高まる形状で、6 mm 高である。かえり径 9.4 cm。薄手の作りで焼き重みが著しいが、天井部は広く平坦であったろう。体部は直線的に下がり、端部が丸味を帯びる。身受け部は平坦、かえりは短く内傾して尖る。胎土に砂粒を少量含み、青灰色を呈す。

III 類（第17図22・23）：ボタン形状のつまみをもつが、内面にかえりはつかない。つまみは、22 が頂部中央で僅かに高まり、23 は側端がかなり外反して尖り気味、中央部にかけて 3 mm ほど高まる。22 は口径 14.3 cm, 器高 2.6 cm, 天井部から口縁部にかけて脹らみをもって下がり、端部が断面三角形状で短く直に立つ。このため口縁部外面に 5 mm 高で縁取り状の棱線が入る。23 は口径 15.5 cm, 器高 3.3 cm でやや大き目、器形も若干相違する。天井部から緩く下がってやや内に折り、7 mm ほどの口縁部をなす。端部は丸味をもつ。この間、器壁は次第に薄くなる。ともに内面頂部を仕上げナデ、他は横ナデ調整している。色調は青灰色を呈し、23 の外面に灰緑色自然釉が付着する。23 の胎土は砂粒をやや多く含む。

高杯蓋

口縁部内面にかえりがつくもの、つかないものとで 2 分類する。

I 類（第17図24）：かえりがつかない。口径 14.1 cm, 器高 5.9 cm で天井部が高く、口縁部にかけては丸味をもって下がり、全体に丸い塊を伏せた観を呈す。つまみはボタン形状で、外反した側端が最大径 3.7 cm を測る大形のもので、頂部中央が僅かに高まる。天井部・体部の境に沈線が巡り、体部～口縁部まではほぼ一様の厚さである。端部は丸味をついている。胎土に細粒をやや多く含み、青灰色～灰色を呈す。

II 類（第17図26）：内面にかえりがつき、かえり径 14 cm, 器高 4.2 cm である。つまみはボタン形状で、大きく外反した側端は尖り気味、頂部中央にかけてやや窪む。天井部～口縁部にかけて丸味を帯び滑らかに移行し、かえりの手前で薄くなる。身受け部は細身で短く、ほぼ平坦である。かえりは基部で厚く、直に内傾して尖る。調整は内面頂部が仕上げナデ、他は横ナデ

であるが、天井部・体部の境にヘラ削りが残る。胎土に砂粒を少量含み、青灰色を呈す。

高坏身

有蓋・無蓋で2分類し、脚裾部だけのものをⅢ類とする。

I類：口縁部に受部をもつ有蓋高坏であるが、残存部によって2区分する。

I a類（第17図25）：脚部をすべて欠く。坏部口径12.8cm、高さ4.5cm、厚手の作り。体部で薄く、口縁部で幾分割厚する。端部はやや引き上げて尖り気味、受部が沈線上で窪む。立ちあがりは8mm高、内傾して先端部が直に立ち尖る。基部で太く、安定感がある。底部はヘラ削りの上を横ナデ調整する。胎土に砂粒をやや多く含み、焼成甘く軟質、灰白色～灰色を呈す。

I b類（第18図2）：坏底部及び脚部が残る。脚高9.7cm、脚端部径10.9cmを測り、透孔は上下2孔。上孔は3.3×0.5cm、坏底部からの切り込み、下孔は4.7×0.5cm内面で縮少する。上下孔間に沈線が2条入る。脚の端部は3mmほどはね上がって尖り気味。胎土精良、内外面淡灰色を呈す。

II類：口縁部に受部のつかない無蓋高坏であるが、坏部の形態によって区分する。

II a類（第17図27）：环の上半部のみが残る。しかも、器壁が薄く、焼き歪みがある。口径12.8cmほど、底・体部の境が明瞭に角張って棱が入る。口縁部にかけては、内彎気味にはんの少し開き、端部が丸味をもつ。胎土に砂粒をごく少量含み、内外面灰色である。

II b類（第18図1）：脚部中ほどより下方を欠く。坏部はほぼ復元でき、口径12cm、坏部高4cmを測り、全体に薄手の作りである。底部は広く平坦、体部との境で角張る。体部中ほどに断面三角形状の突帯がつき、その直下に8~9mm長のヘラ描きの連続文が施されている。突帯のところでやや傾斜が変わり、口縁部にかけては外反しながら、端部を尖り気味にしている。脚残存部で上下3孔の透孔が認められ、上下孔間に平行沈線が2条入る。脚部内面の上部に紋り目が残る。胎土精良、内外面淡灰色を呈す。

III類（第18図3）：脚裾部のみ残る。透孔が3孔認められ、形態上からもII b類に接合復元できるものかと見受けられるが、胎土・焼成の観察では別個体と判断する。端部は薄く外方に引き出し、外面が6mm巾の縁取りをしたような形状、下端部を尖らせている。胎土に砂粒をごく少量含み、内外面淡灰色を呈し、外面一部に暗灰色自然釉が付着する。

短頸壺

口頸部の形態によって2分類する。

I類（第18図4）：口径6.7cm、肩部最大径13.5cm、器高9.6cm。口頸部が1.2cmと短く、肩部との境に沈線が入る。肩部は直線的に下がり、肩部との境が弱く角張る。底部にかけて6本の棱線が入るが、丸味を帯び、底部を連続回転のヘラ削り調整している。胎土に砂粒を少量含み、内外面青灰色を呈し、堅緻である。

II類（第18図5・6）：5・6とも口頸部が2.5cmと長く、やや外反して立ち、口縁端部は丸味をもつ。全体に薄手の作り。肩・肩部を区分するところに浅い沈線が入るが、移行は滑らかである。口径は5が8.2cm、6が9.1cmで大き目だが、肩部最大径は同じく12.3cmである。内外面青灰色、一部肌荒れ状、5の胎土は砂粒をやや多く含む。

壺

口頸部の形態や大小によって3分類する。

I類：口頸部が肩部よりほぼ直に立って、口縁部で大きく外反する。口縁部の作りや体部の形態により2区分する。

I a類（第18図8）：底部を欠く、口径11.8cm、胸部最大径21.3cm、頸部高3.5cm。口縁部は外面に丸味をつけ、上端に整形時の引きしめが残る。肩部はかなりきつい傾斜で下がり、胴への移行部に平行沈線が2条巡る。胸部最大径は体部のはば中ほどに位置するようだ。外面淡灰色～灰白色を呈し、軟質である。

I b類（第18図9）：ほぼ器形を復元した。口径9.6cm、胸部最大径21.3cm、器高19.9cm、頸部高3cm。口縁部は外面に丸味をつけて折り曲げ、下端をかえり状に尖らせている。頸部中ほどに浅い沈線があり、肩部との境が角張る。肩～胴～底部への移行は丸味をもたせて滑らか、底部で器壁が薄くなる。肩～胴への移行部には、平行沈線で区画された、縱方向のヘラ刻みによる凹線文が施されている。胴～底部外面に格子叩き目が入り、一部その上に横ナデ調整をし、内面には同心円叩き目が残る。胎土に砂粒を少量含み、外面淡青灰色である。

II類（第18図10）：体部の大半を欠く、口径12.3cm、頸部高3.7cm、口頸部がほぼ直立し、他と明瞭に異なる。口縁端部は内に傾斜をもたせてカットした形状である。口頸部で厚く、肩部で次第に薄くなる。肩部内面に同心円叩き目が残る。胎土に砂粒をやや多く含み、外面に灰緑色～暗灰緑色自然釉が顯著に付着する。

III類（第19図1）：口径17.6cm、胸部最大径29.5cm、器高27.8cmを測る大形壺で、体部断面が正円形にちかい。口径の広さに比して、頸部が2.9cmと短い。口頸部は直線的に外反し、口縁部が外面で丸く肥厚する。体部は平行叩き目の上をカキ目調整し、内面には同心円叩き目を施している。全体に丁寧な作り、整った観を呈す。焼成が甘く軟質、灰白色である。

提瓶（第18図7）：体部の下半を欠く。口径8.3cm、頸部高3.5cm。口頸部は外反して次第に薄くなり、端部を短く折り曲げて、上下で僅かに段づかせている。体部断面は正円形にちかい。肩部の傾斜に合わせて折り曲げた把手は、先細り状で先端が丸味を帯びる。体部前面には径10cmほどの同心円状カキ目が施されており、肩部の内面には上下方向のナデ調整が見られる。胎土・焼成とも良好で灰色を呈し、頸部外面に灰黒色自然釉が付着する。

ロ 土師器

壺（第18図11）：口縁部を欠くが、口径12.8cm、器高9.4cmと推定した。胸部最大径12.7cm。口頸・体部の境は僅かに引き締めがある程度、底部にかけて滑らかに移行し、次第に薄手となる。胎土に砂粒をやや多く含む。焼成不良で軟質、外面黄褐色である。

盤（第18図12）：器高3.2cm、口径16.5cmと復元測定した。底・体部の移行は滑らかで丸味を帯びる。口縁部にかけて外反し、端部は薄く引き上げて丸味をついている。色調は赤褐色で、外面及び口縁部内面に丹塗り跡を認める。底部はヘラ磨きである。胎土・焼成とも良好である。

ハ 工 具

鉄のみ（第21図34）：基部を欠損し、現存長12.1cm最大巾1.1cm、厚さ8mmを測る。断面長

方形を呈し、切先に向って巾、厚みとも次第に減少し、切先はかなり鈍い。

鉄斧 (第21図36~39) : いずれも無肩の長細い袋式である。36は出土中重量のある大形品で、長さ14.1cm、刃部巾5.2cmを測る。袋部は深さ5.6cm、径 4.4×3.5 cmほどの楕円筒をなす。刃部に至る背巾1.1cm、刃先はかなり鋭利である。袋部を欠失する39も背巾1.2cm、刃先巾5.3cmの大形品である。37・38は長さ8.5~9.8cmの小形品である。37は誘化が著しかったが、ほぼ原形が確認でき、刃部巾3.8cm、袋部径3cm、深さ4.9cmの円筒形、38は刃部巾3.6cm、袋部径 3.3×2.4 cm、深さ4cmほどの楕円筒を呈す。これらは著しく銹着した鉄塊で出土し、袋部に木質が認められず、柄を着装しない状態で副葬されたものであろう。

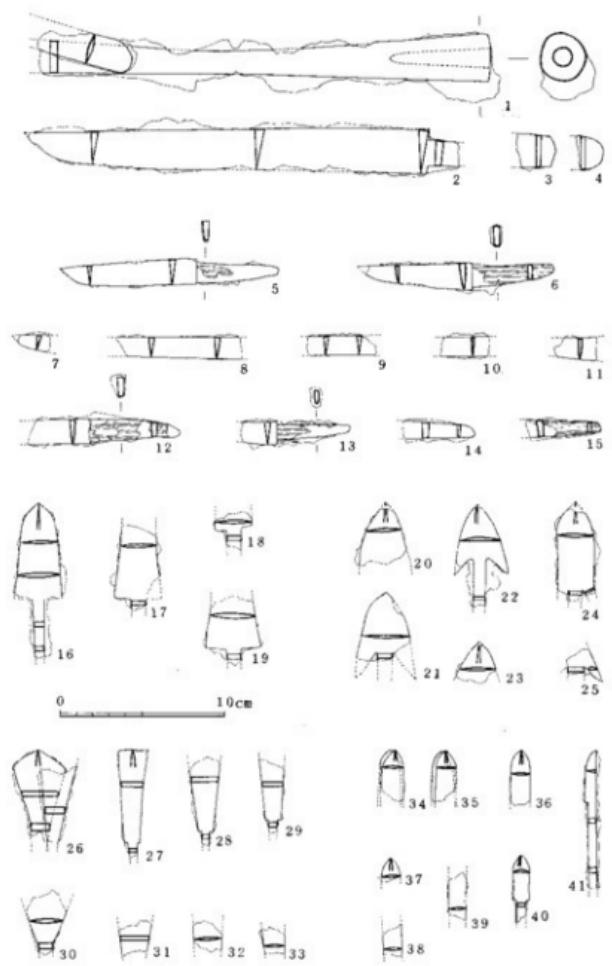
鉄鎌 (第21図40~43) : いずれも刃線が先端部で大きく内轉し、下に突き出たように尖る曲刃鎌に属する。40は先端部を欠き、現長13.6cm、刃部巾2.3cm前後、背巾2~3mm、細身で鋭利である。着柄部の折り返しは5mmほどで、柄が刃部に対して直角に着くものであろう。刃部中央が他所より巾狭・薄身であるのは、実用による擦り減りを示すものか。41は着柄部の巾4.2cm、刃部巾3.7cm、背巾4mm、折り返しは先端をやや巻き込み、柄を刃部に対し鈍角に着けるものである。この種の曲刃鎌は、草刈り、小枝をはらう雑鎌の可能性が強い。42の曲刃部は刃部巾3.2cm前後、背巾3~4mm、41と同一個体か。43は刃部巾2.5cm前後、背巾2mm、薄身で他と異なる。

筋鎬車

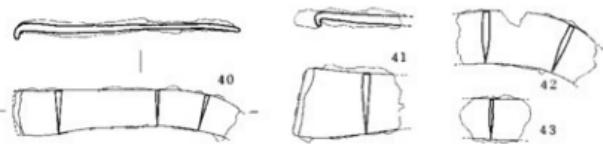
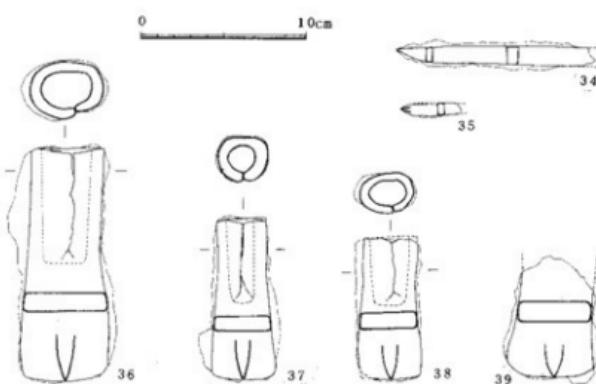
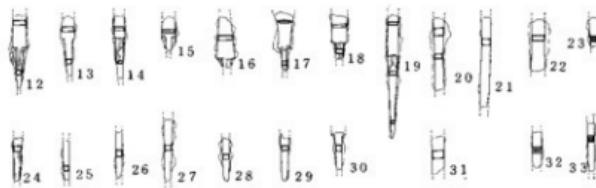
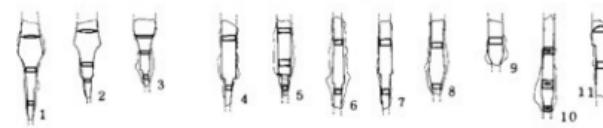
いずれも滑石製であるが、円板形と截頭円錐形とでⅡ分類する。

I類 (第22図1~2) : ともに径5cmの正円板形である。1は暗緑色、厚み1.1cm、孔径7mm。上面中央穿孔部にかけて4mmほどの高まりがあり、下面も僅かにふくらみをもつ。下面に穿孔部を貫き直徑を通した、ごく浅い線刻様のきず跡がある。2は青緑色、厚み8mm、孔径7mm。上面中央穿孔部で幾分ふくらみをもつが、下面是平坦。上下面に同心円状の細い削り目が残る。

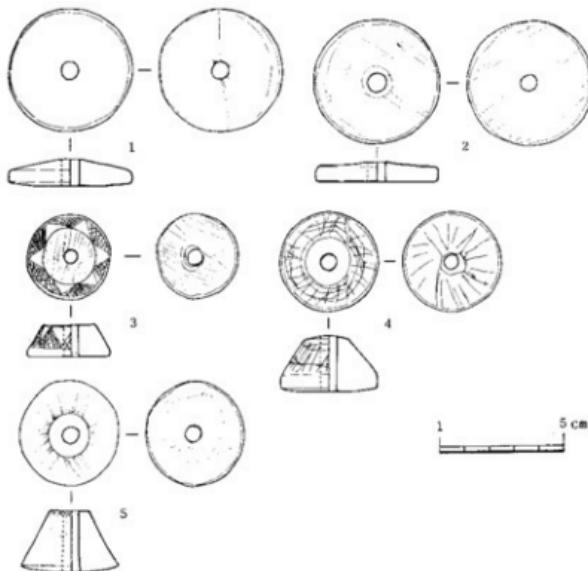
II類 (第22図3~5) : 截頭円錐形である。3は上下面明褐色で、各々径2.2cm、3.4cmの正円形にちかく、厚み1.3cm、孔径6mm。側面はぎんねずみ、斜格子状の線刻による鋸歯文が施されている。下面にも孔部に対し同心円状の線刻が2条あり、端部近くに斜格子状線刻の痕跡が認められる。4は茶褐色、上面 1.8×2 cm、下面径4cm、厚み2.2cmを測り、上下面とも穿孔部にかけてふくらみをもち、孔径は上部が僅かに大きくなる。下端部の角は落され、丸味をもつ。側面の線刻文は、上面円形に対し同心円を意識した3~4条の線刻に、上端より輻射状の線刻を施したものであり、丁寧ではない。下面にも孔部を囲むように不整円を描き、やはり輻射状に線刻を施している。5は暗緑色、上面 1.6×1.8 cm、下面 4×4.2 cm、厚み2.5cm、下面で穿孔部にかけてややふくらみをもつ。穿孔はほぼ直、孔径は下部が僅かに大きくなる。下端部は角が落され、1~2mm巾の面状をなし、側面には上端より輻射状の削り跡がかなり明瞭に残る。



第20図 6号墳出土鉄器(1)



第21図 6号墳出土鉄器(2)



第22図 6号墳出土物

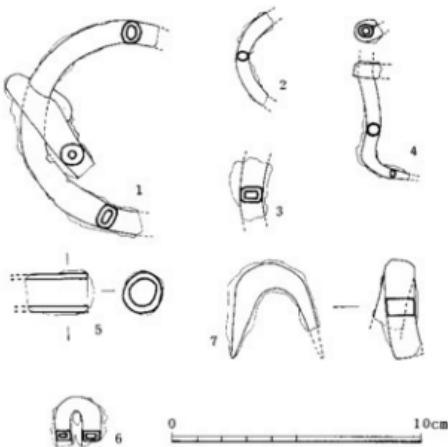
ニ 馬具

轡（第23図1・3）：1は素環の鏡板に銜の一部が接着している。鏡板は外径8.3前後の正円形にちかいものになると見られ、断面が径 1×0.7 cm、厚さ2mmほどで梢円筒をなす。銜の一部は径1cm、厚さ3mmほどの円筒棒状で、鏡板を巻き込み環状となっている。3は1の鏡板に類似した形状を示し、同一個体か。

鉄製環（第23図2）：外径4.3cm前後の正円形を呈するものの一部で、断面 5×4 mmの梢円形、鏡板とするには疑問がある。

鉗具（第23図4）：残部の形態より鉗具の一部とした。主棒は径5mm前後、曲り目あたりから次第に細くなり、断面梢円形となる。刺金のつくところは筒状となっており、刺金は主棒に密着させて巻き込み、端部をきちんと合わせている。

これらの他に用途不明の鉄器5・6・7（第23図）がある。5は底端を直にカットし、径1.6cm、厚さ2.5mmほどの円筒形、やや先細り状で、馬具とするにも疑問がある。6は断面方筒形で、曲げ部より2~3cmのところで接するものと考えられ、兵庫鎖の形状を呈する。7は



第23図 6号墳出土馬具等

鍍留金具の一部かと見受けられるが、曲げ部から約3.8cm長、先端開き巾3.5cm、鍛打穴がない。断面方形で曲げ部で厚く先向いて薄くなる、ことなどから見て通常の鍍留金具と異なる。

ホ 武 器

鉄鎌(第20図1)：若柄袋部の外側には突起部がなく、上部が扁平で聊か鋒の形態と趣を異なる。そして、玄室北側袖部において鐵鎌、鐵斧と銹着して鐵塊状で出土したことを考え合わせると、工具とも想定できうる。現長27.5cm、袋部下端は外径約3cm、厚さ8~9mmの肉厚な円筒状である。円形棒状部は、ほぼ中ほどで径1.3cmと最も細くなる。上部に銹着する両丸造りの残片は、直に主体の折損したものとは定め難い。

鉄刀(第20図2~4)：2は平棟・平造りで、刃わたり24.4cm、身巾が関部で2.8cm、中央部で2.5cmを測り、ほぼ刀身の原形を認める。刃先は鋭く、両闊の切り込みが直角で大きい。茎は大半を欠くが、先細りの形状であり、断面長方形で厚身である。3・4は、扁平な基端部の残片である。

鉄刀子(第20図5~15)：5・6が完形にちかく、他は刃部及び茎の一部が残るものである。関部の残るものは、いずれも両闊で、6・13は関部の段づきが大きく明瞭である。12の茎は上端が内彎気味に先端部に至るが、他は直か、幾分上がり気味である。5・6・12・13・15の茎には、ほぼ全面乃至は一部に木質が付着する。5は刃長8.3cm、基長5cm、関部巾1.5cmを測る。6は5に比べ関部から切先に向って刃巾の減少が大きく、刃長が6.9cmほど、基長4.9cmである。7~11は他と直ちに接合復元できない残片であるが、8は5・6・12と比して刃巾が狭く、

かなり長くなるものと見受けられる。12は関部巾 1.5 cm, 基長 5.4 cm, 13は関部巾 1.4 cm, 基長 4.4 cmで、各々刃部の形状が、12は5に、13が6に類似する。このことから出土鉄刀子は、5と12, 6と13, 8の3類に分けられるだろう。

鉄 鑑

玄室出土鉄鑑60点中、完存するものはないが、鋒部の完形乃至それにちかいものが7点あり、鋒部の形式が判明するものについて言えば43点である。それらは広根式5分類16点尖根式4分類27点に分けられ、多種にわたる出土様相を呈している。なお、後者のうちでは鑑箭式に属するものが21点を数え、目立って多い。

I類 (GR20図16~19)：両丸造りで広鋒長三角形状を呈する。16は峰長 5.9 cm, 峰最大巾 2.9 cmを測り、17も同形大のものであろう。類中、18が小形、19が峰最大巾 3.3 cmで一回り大形品の残片である。いずれも、峰下端は笠被ぎから上がり気味に広がり、笠被ぎは断面長方形である。

II類 (第20図21~29)：広鋒長三角形状を呈し、脇抜式である。22は片丸造りで、峰長 4.2 cm, 峰最大巾 3.3 cmを測る。25は脇抜部の小片であるが、断面片丸形で22に類するものであろう。21は両丸造りで、脇状部を欠くが、峰長 5.2 cm, 峰最大巾 3.7 cmほどと推測される。20・23の残片は形状から推して広鋒両丸造りで、この型式に属するものであろう。なお、19は笠被ぎの形状からみて、この型式の身部に伴うものと身受けられる。

III類 (第20図24)：両丸造りで柳葉式、脇抜を有す。峰巾は上部で 2.3 cm, 脇抜基部で幾分狭くなる。脇抜部は薄く、かなりな長さになるものか。

IV類 (第20図26)：圭頭斧箭式である。26は峰長 4.5 cm, 峰最大巾 3.2 cmを測り、笠被ぎとの境で巾狭、身厚となる。峰は中央で山状に角張り、両側面は尖らず、断面が扁平な長方形である。本体には同型式、巾狭の残片が接着し、31もこの型式に属するものの残片である。さらに30も同様であろうが、両側面が両刃形で尖り、32・33の残片がこれに類する。

V類 (第20図27~29)：斧箭式だが峰の上端が直線状に尖って最大巾を測り、両側面は尖らず、基部に向って次第に巾狭となる。全体に羽子板形状を呈する。笠被ぎとの境は両闊、笠被ぎが細身である。27は峰長 5.7 cm, 峰最大巾 1.8 を測り、29もほぼ同形大のものであろう。28は峰の基部から上端に向ての広がりが幾分大きい。

VI類 (第20図34~40)：40は片丸造りの鑑箭式に属し、峰が柳葉形である。峰長 2.7 cm, 峰最大巾 1.0 cmを測り、笠被ぎとの境は両闊で段づきも明瞭である。34~39も柳葉形の峰残片であるが、いずれも両丸造りで峰巾 1.2 ~ 1.4 cm, 峰長も40よりかなり長くなるようだ。また、11は厚身の片丸造り鑑箭式に属するものであり、笠被ぎとの境が両闊で段づきも大きい。

VII類 (第20図41)：片闊で片刃箭式である。峰長 3.2 cm, 峰巾 7 mmを測り、関部はほぼ直に 2 mmほどの段づきである。笠被ぎは方形棒状で、一部を欠く。

VIII類 (第21図1~3・17)：1・2は両丸造りで狭鋒長三角形を呈する。峰最大巾が 1.5 ~ 1.6 cm, 関部巾 6 ~ 7 mmを測り、ほぼ同形大である。峰は途中よりかなり大きく内弯する形状で、関部に向てこの部分の断面が扁平な長方形である。ただ、2の方が内弯のはじまりが早い。なお、3・17も同型式に属するものであろう。3は内弯が緩く、17は内弯部が両丸造りである点が他

と異なる。

IX類：いずれも鋒先部を欠くので、その型式を定め難いが、現状で鑿箭式に属するものと判断したものである。

IX a類(第21図4)：鋒は先部に向ってやや巾広、断面長方形である。関部は直に切り込み明瞭であり、12の茎のみ断面隅丸方形、他は長方形をなす。5・12・18の茎部には木質が付着する。

IX b類(第21図6・7)：鋒巾が先部に向って同程度若しくは巾狭となる。中でも16は著しく巾狭となる形状で、関部の切り込みが大きい。茎部は14のみが断面梢円形をなし、他は方形に近い。14・15・16の茎部には木質が付着する。なお、24～29の茎部残片は、形状から推してIX a類または此類の身部に伴うものであろう。24には全面木質が付着する。

IX c類(第21図10)：鋒・笠被ぎともに断面方筒状をなし、他と明瞭に区別できる。鋒は先部に向って僅かに狭ばまり、笠被ぎとの境は緩く巾狭となる。23・32・33は、此類に属する残片である。

IX d類(第21図8・9)：鋒は下部で僅かに脛らみをもち、笠被ぎとの境は級く巾狭となる。鋒・笠被ぎともに断面長方形を呈す。なお、20・21は笠被ぎの、22は鋒の残片であろう。

ヘ 装身具

耳環(第24図1～9)：玄室より出土した9個の耳環は、いずれも中実の銅胎であるが、金・銀張りによって金環3個、銀環6個に分けられる。各々の計測は次の第1表のとおりである。

このうち、3と4は出土状態や計測値からみてセット関係になることは確実である。また、5と6も出土場所をほぼ同じくし、計測値や形状からみてセット関係をなすものとしてよいだろうし、1と2も計測値や形状が近似しているところよりセット関係になるものと見做して差し支えなかろう。

ただ、他の7・8・9については、8と9の出土場所が近いといえども外装・計測値がまったく異なり、1点かけ離れて出土した7も出土中の大形品で他にセット関係をなすと見做されるものは見当らず、これらは各々異なるセットに属するものと判断する。

従って、本玄室出土の耳環は、先ず3セット関係が考えられ、さらに加えて3セット分が推測される。しかし、必ずしも2個1セットをもって1被葬者の副葬としたとは断じて難く、一応本墳の埋葬遺体は4～5体以上であったと考慮する。

切子玉(第24図1～4)：いずれも白色透明の水晶製であるが、部分的に汚損や亀裂のため乳白色の渦りが見られる。造作は中ほどを脛らませて両截面とともに六角形の棱をつけている。穿孔は一方向からであり、4がやや傾孔である他は、ほぼ直になされている。各々の計測値は次の第2表のとおりである。

管玉(第24図1～8)：7・8がグリーンタフ、他6個が碧玉製である。1は暗灰緑色、2・3が暗緑色、4・5・6が深緑色、8が青緑色を呈し、研磨もよく滑沢である。7は風化が

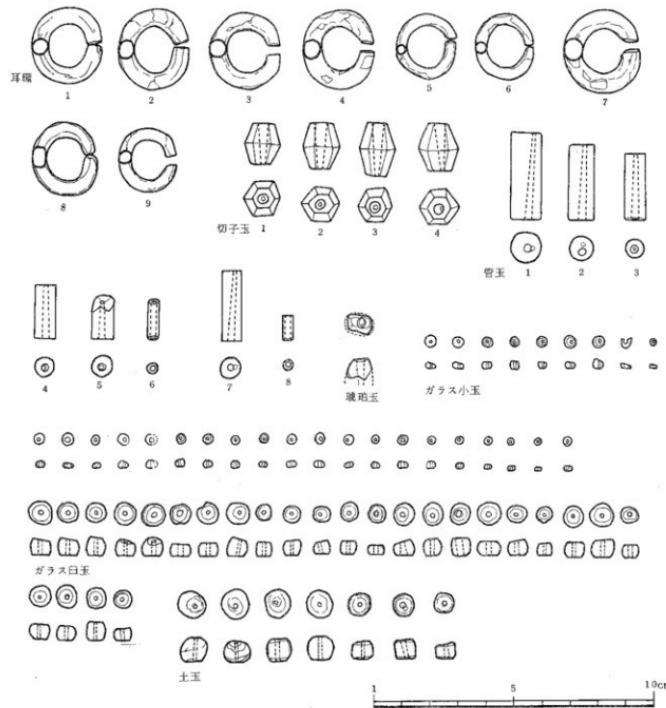
第1表 6号墳出土耳環の計測値

図番号	外径 (mm)	断面形 (mm)	外装	出土場所	外観
1	2.7 × 2.5	6 × 6	銀	中央部より奥 壁寄りの北側	暗銀色。かなりな部分が腐蝕 により緑銹を生じている。
2	2.8 × 2.5	6.5 × 5.5	銀	北東側部奥壁 前	暗銀色。環外側部は腐蝕のた めざらつき、部分的に緑銹を見 る。
3	2.8 × 2.6	6.5 × 6	金	南西隅部	腐蝕が著しく、外面はほとんど に緑銹が生じているが、僅かに 金張りを認める。
4	2.8 × 2.5	6.5 × 6.5	金	南西隅部	腐蝕が著しく、外面はほとんど に緑銹が生じているが、僅かに 金張りを認める。
5	2.3 × 2.15	4 × 3.5	銀	中央部北側	暗銀色。腐蝕のため光彩はな く、部分的に外装が剥離し、緑 銹を生じている。
6	2.4 × 2.1	4 × 4	銀	中央部北側	暗銀色。腐蝕のため光彩はな い。
7	3 × 2.8	8 × 7	銀	中央南側壁寄 り	腐蝕のため部分的に外装が剥 離し、緑銹を生じ環内側部にのみ 銀色を見る。
8	2.7 × 2.3	7.5 × 5	銀	中央部北側	腐蝕が進み、半ば外装が剥離 し、緑銹を生じているが環外側 部はしづい銀色を呈している。
9	2.3 × 2.1	4.5 × 4.5	金	中央部北側	腐蝕が著しく、外面はほとんど に緑銹が生じているが、僅かに 金張りを認め得る。

第2表 6号墳出土切子玉計測値

図番号	長さ (cm)	断面径 (cm)	孔径 (cm)	
			大	小
1	1.5	1.3	3.5	1.3
2	1.6	1.3	4.5	2
3	1.9	1.3	4	1.5
4	1.7	1.5	4	1.3

著しく、緑白色、軟質に変容している。また、7は両截面が斜め方向になっており、6は欠損側に、本来のものと思われる、丸く研磨した痕跡を認め得るので、截面の一方に丸く脛らみをつけた造作であったものかと考える。1～5、8は両截面が平坦で、その径も同程度であり、部分的に幾分歪みも見られるが正円形にちかい。なお、2・5は両截面の端部を僅かに磨滅し、丸味をつけている。穿孔は、いずれも片面よりのもので、1～3が傾孔、4～8がほぼ直に穿孔されている。各々の計測値は次の第3表のとおりである。



第24図 6号墳出土耳環・玉類

第3表 6号墳出土管玉計測値

図番号	長さ(cm)	截面径(mm)		孔径(mm)	
		大	小	大	小
1	3.1	11	11	3	1
2	2.7	9	9	2.5	1.5
3	2.5	7	7	2.5	1
4	2.4	8	7	3	1
5	1.9	7.5	7	2.5	1.5
6	1.6	8	8	2.5	1.5
7	1.5	4	4	2	1.8
8	0.9	4	4	2	1.8

琥珀玉(第24図)：全容は明らかにできないが、截面は 6×4 mmで端部が丸味を帯び、中ほどで最大径を測るものであろう。孔径は 3×2.5 mmほどで、次第に小さくなるところより、残存部が穿孔側と考える。表面は風化により白っぽく滑らかでないが、割れ口面は濃茶色で光沢がある。なお、もう一個体分を含む細残片21が出土した。

ガラス小玉(第24図)：青色21個、黄色8個、黄緑色1個が出土した。形状は一定せず、截断面を残すものが多く、球形にちかいものは僅かである。径 $3 \sim 3.5$ mm、厚み $2 \sim 2.5$ mmを測るもののが16個、次いで径 $4 \sim 4.5$ mm、厚み $1.5 \sim 3.5$ mmのものが11個を数える。そして、径 2.5 mm、厚み 1.5 mmのものが3個ある。

ガラス臼玉(第24図)：34個出土した。すべて表面がざらつき光沢はないが、細碧色である。造作は棒状ガラスを截断する技法によるものと思われ、両截断面が斜め方向になるものがほとんどである。側面は丸味を帯びているが、截断面の縁の研磨もなく、丸玉に整形されたものはない。ただ粗製ではあるが、径のわりに穿孔が細く、頑丈な観を呈する。大きさでは、径 $7 \sim 7.5$ mm、厚み $6 \sim 6.5$ mmを測るものが最も多く、18個である。次いで、径 $6 \sim 6.5$ mm、厚み 3.5 mmのものが8個、径 $8 \sim 8.5$ mm、厚み $5 \sim 6.5$ mmのものが5個、径 $5 \sim 5.5$ mm、厚み $3.5 \sim 5$ mmのものが3個である。

土玉(第24図)：109個と残片7が出土した。すべて土質は精良、焼成良好で硬質、黒褐色から灰褐色を呈する。大きさによって2群に分かれる。径 $9 \sim 10$ mm、厚み $7.5 \sim 9$ mmのもの6個と径 $7.5 \sim 8$ mm、厚み $6 \sim 7$ mmのもの103個である。前者はほぼ球形にちかく整形されているが、後者では両截断面に丸味をつけ球形にちかく整形したものは少なく、截断面が斜め方向をなして縁が残るものが多い。なお、前・後者の全延長は約69cmとなり、ほぼ一連鎖の状況を示している。

図は大小例を抄出したものである。

IV. 第5号・6号墳の石室について

黒島林5号墳は乱掘による石室の破壊が著しいため明らかではないが、6号墳の石室は石川巖氏のいう「母神山様式」に含まれるであろう。石川氏によれば母神山様式の横穴式石室は天井石⁽¹⁾がなく、側壁は低く、玄室床面には敷石をするなどの特色をもつとされている。ところが、母神山様式の特色のうち敷石については、県内の多くの横穴式石室に認められつつあり、また、石川氏が例として挙げた黒島林1号墳・小森塚古墳群・道下1号墳・宗像古墳などのは多くは調査前にすでに破壊を受けていたので、これらのすべてが築造当初から天井石を持っていなかったと断定することは大胆に過ぎるように思われる。したがって、石川氏によって設定された母神山様式にはなお検討の余地があるものといえよう。

いま改て黒島林5号・6号墳の石室をみると、顕著な特徴として玄室が胴張りを呈することが挙げられる。玄室最下段の石材が遺存している6号墳は、玄室の長さ3.05mに対して、幅は奥壁付近で1.7m、中央部やや奥駆寄りで最も広くて1.8m、玄門部付近で1.4mを計り、玄門部が狭まったゆるい胴張りをしている。

これに対して5号墳は玄室最下段の石材が完存しないため正確は申し難いが、玄室の長さ3.4mに対して幅は奥壁部1.6m、中央部1.9m、玄門部1.6m程度を計り、奥壁部と玄門部の幅がほぼ等しく、中央部が若干張ったもので、6号墳とは異なったプランをしている。

ところで、香川県内には胴張りをもった横穴式石室がいくつか知られている。その主なものを挙げると、黒島林6号墳に類似したプランをもつものとしては、黒島林15号墳・三豊郡大野原町宗像古墳・同道下1号墳・同西の後1号墳・大川郡長尾町緑ヶ丘古墳などがある。これらの石室は玄室奥壁部に比べて玄門部の幅が0.3~0.4mほど狭く、最大幅は奥駆寄りであるか、側壁の場合にはそれより10cmを越えることはなく、側壁はゆるやかなカーブを描いて玄門部へと狭まっている。⁽⁴⁾⁽⁵⁾ 黒島林5号墳に類似した横穴式石室には、黒島林1号墳・高松市石清尾山指鉢谷2号~4号墳⁽⁶⁾・その他がある。指鉢谷4号墳は玄室中央部が前・後に比べて約0.4mも幅広いが、多くは0.2~0.3m程度の胴張りである。

以上のように、香川県内の胴張り石室は玄室の胴張りが特に著しいとは言い難い。しかし、これらの玄室が偶然の結果ではなく、胴張りを意識して作られたことは、玄室最下段の石材がゆるやかな弧を描くように配置されていることから知ることができる。

ところで、胴張り石室は畿内や東部瀬戸内の地域にはあまり認められないようであり、多い地域として北部九州・関東が知られている。もっとも、両地域の胴張り石室と香川県内のそれと比較すると、香川県内の胴張り石室は側壁の張りがかなり弱く、玄室プランは異なったものとなっている。しかし、それでも、基本的には玄室プランが長方形に限られると思われる地域を周囲にもちろん、香川の石室はやや特異な様相を示している。

つぎに、香川県内の胴張り石室がどのようにして成立したのかを考えるために、他地域の胴張り石室をみるとことにしてよう。ただ、関東の胴張り石室は時期が新しいようであり、また、関東から香川への伝播も当時の社会情勢からは考えにくいくことなので、ここでは北部九州の胴張り石室をみるとことにしたい。

北部九州において、玄室側壁が弧状をなす胴張り石室は筑後川流域に特に多いが、分布範囲は福岡県北部・同飯塚市周辺・佐賀県東部・熊本県北部・筑後川の上流にあたる大分県日田市周辺におよぶ。このうち、筑後川流域では古墳時代終末まで盛んに築造されるが、比較的古い時期のものとしては福岡県浮羽郡日の岡古墳⁽⁸⁾・同八女郡山の前2号墳⁽⁹⁾・同朝倉郡妙見8号墳⁽¹⁰⁾などが知られており、壁面装飾の内容や出土須恵器から6世紀前半～中葉に比定されている。

これに対して香川県内の胴張り石室をみると、6世紀後半ないし末頃以後の須恵器を出土して⁽¹¹⁾おり、九州の例より出現時期が新しくなる。しかも、玄室プランだけを取り上げるならば、黒島林6号墳に類似した例として日の岡古墳・山の前2号墳・妙見8号墳などがあり、黒島林5号墳に⁽¹²⁾類似した例として福岡県宗像郡スペットウ古墳などがある。

ところで、母神山の所在する観音寺市には九州の阿蘇凝灰岩でつくられた舟形石棺を内部主体とする丸山古墳・青塚古墳が5世紀代に築造されており、横穴式石室築造以前にこの地域が九州と深い関わりをもっていたことはすでに明らかにされている。そして、そのような地域に黒島5号墳・6号墳が所在することは、両石室が直接九州から伝えられたとするのではないとしても、香川における胴張りという玄室の構造もこうした九州との深い関わりの中で成立したのではないかと思われる。

しかしながら、胴張り構造としばしば結びつき、北部九州に特徴的な複室構造の横穴式石室は、香川では現在のところ、黒島林5号・6号墳に近い観音寺市母神山カンヌ塚古墳に痕跡的に認められるのみである。また、前記の香川県内の胴張り石室のうち天井石が遺存しているものについてみると、玄室天井の高さは玄門部天井石の上面に等しく、九州の石室にみられるような玄室天井が非常に高い例はない。

このようにみてくると、香川における胴張り石室が仮に北部九州から伝えられたとしても、石室を築造したのは当時の讃岐の人々であり、北部九州の石室をそのまま複製しているのではないのであり、この点に留意しつつ今後の評価を下す必要があるものと思われる。

（註）

1. 石川巖ほか『小森塚古墳群調査報告』 1974。
2. 石川巖ほか『母神山黒島林1号古墳群調査報告』 1967。
3. いずれも註1に所収。
4. 註1と同じ。
5. 1975年に県教委・長尾町教委が調査。
6. 高松市教育委員会『高松市石滝尾山古墳群緊急発掘調査概報』 1・2 1971・1972。
7. 梅原末治『讃岐高松石滝尾山石塚の研究』『京都帝國大学文学部考古学研究報告』 12 1933。
8. 小林行雄編『装飾古墳』 1964。

9. 西谷正・佐田茂・川述昭人はか「山の前古墳群の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅲ 1972。
10. 福岡県立朝倉高等学校史学部『埋もれていた朝倉文化』 1969。
11. 香川県内の須恵器編年は、渡部明夫「香川県における須恵器編年（1）－觀音寺市千尋支群・被歌郡浦山古墳群・今池古墳を中心にして－」『香川史学』 6 1977 による。
12. 堀鳥林5号・6号墳の両タイプとも直接北部九州から伝播したとするのではなく、5号墳のタイプは長方形玄室プランの石室に、6号墳のタイプは奥壁部の幅に対して玄門部の狭まる玄室プランの石室に胴張りをもたせた結果、すなわち、在地の石室に胴張り構造のみを採用した結果、香川の胴張り石室が成立したと考える方が良いのではないかとも思われる。
13. 文献史学の側からは岸俊男「紀氏に関する一試考」『日本古代政治史研究』 1966 があり、考古学の側からは藤田憲司「讃岐の石棺」『倉敷考古館研究集報』 12 1976 がある。
14. 1973に県教委・觀音寺市教委が調査。石室全長約10m、玄室長約5m、幅約2.3mを計る巨石墳で、玄室プランは約0.3の胴張りをもつが、玄室が大きいために目立ったものではない。
15. 三豊郡大野原町施賀塚古墳などは複室構造であるともされているが、現在は不詳である。
16. この点、カанс塚古墳の玄室天井は高く、やや異なる。

V. おわりに

母神山古墳群はこれまでいくつかの調査が行われたが、古墳群全体を把握するには至っていない。現在までに明らかにされた点を略述すると、古墳群は母神山丘陵のほぼ西半分に分布する50基あまりの古墳より構成され、丘陵北西部の三谷上池周辺に分布するものと、南西部の千尋神社周辺に分布するものとに大きく分けられる。前者は30基あまりの古墳よりなるが、その中には前方後円墳の瓢箪塚古墳・大型円墳のカанс塚古墳を含むほか、かつてはさらに1基の前方後円墳が存在していたとされている。本報告の黒島林5号・6号墳もこれに含まれる。後者のグループには大型古墳は存在せず、20基あまりの小円墳からなる。

母神山古墳群の形成過程はほとんどわかっていない。現在のところ前期古墳は知られておらず、すべて後期に属すると考えられている。そのうちで最も早く築造されたのは丘陵南西部に立地する千尋支群である⁽¹⁾。千尋神社支群と称されているグループのうち、調査されたのは1号墳と4号～6号墳の4基の円墳であるが、このうち4号～6号墳はまとめて並んで立地し、石室構造が酷似することや、連続して築造されていることから、この3基こそ支群としてとらえるべきであろうと思われる。これらの3基の円墳は、4号→6号→5号墳の順に6世紀前半～後半にかけて次々に築造されている。そして、いずれも横穴式石室を内部主体とし、横穴式石室においても、この種の群集墳においても現在のところ香川県内で最古に位置づけられる。また、横穴式石室はとともに、奥壁部に対して前部がやや狭い縱長の玄室に貧弱な羨道をもち、片袖型ないしは片袖を意識したもので、プランが岡山県津市中宮1号墳の石室に類似していることは注目される。

これに対しても、丘陵北西部では6世紀末前後墳の古墳しか明らかになっていない。すなわち、黒島林1号・2号・13号・14号墳がそれであり、横穴式石室より鉄地金銅張り立飾り・銅鏡・金銅製單鳳環頭柄頭などを出土した大型円墳のカанс塚古墳もこの時期に含まれる。しかし、この時期は前方後円墳の消滅期にあたるため、瓢箪塚古墳などはさらに古く位置づけられる可能性は強い。もしそうであれば、母神山古墳群全体は丘陵北西部に位置する瓢箪塚古墳・カанс塚古墳などの被葬者を盟主とする集団によって形成されたことになるが、この点は今後の調査に待ちたい。

黒島林5号・6号墳は同一丘陵の尾根上に並んで立地する4基の円墳のうち、先端の2基を指す。この4基の円墳は立地の状態からみて、単位支群を構成する可能性がきわめて強いものと思われる。

ところで、両古墳の石室からは多量の須恵器が検出された。香川県内の横穴式石室から、比較的長期にわたる須恵器をこれほど多量に出土した例はあまりなく、注目される。出土須恵器から知ることのできる両古墳の築造時期は、ともに6世紀末頃（5号墳 蓋Ia類・身Ia類、6号墳 蓋Ia類・身I類）である。また、5号墳では少くとも7世紀初頭頃（身Ib類）・7世紀中葉頃（蓋IIa類？・IIb類・身IIa類・IIb類）・7世紀後半頃（蓋III類）に追葬が行われて

おり、6号墳では少なくとも7世紀前半頃（蓋IIa類？・身IIa類）・7世紀中葉頃（蓋IIc類・身IIb類）・7世紀後半～末頃（蓋III類・身III類）に追葬が行われている。すなわち、両古墳は同時期（6世紀末頃）に築造され、以後7世紀後半～末に至るまで併行して追葬を行っている。こうした状況は福岡市倉瀬戸古墳群のうち、単位支群を形成する5号～7号墳に類似している。

ところで、群集墳が形成される場合、「一家族は一墓域をもち、その域内に戸主の死を契機として次々に古墳を造営し、戸主との類縁関係に応じて追葬者が葬られていく」とされている。このような見方は、前述した千尋神社4号～6号墳のように、3基の古墳が連続して次々に築造され、追葬も短期間に終ってしまうものについては認めることができよう。しかし、黒島林5号・6号墳のような場合には、むしろ、同じ小共同体に属する2家族が同時期に古墳を築造し、次々に追葬を行ったと考える方が妥当ではないだろうか。もしそうであり、なおかつ黒島林5号～8号墳が単位支群を形成するならば、倉瀬戸5号～7号墳における副葬品の明らかな優位性や、同様に、玉類・馬具・武器・農工具などの鉄器・紡錘車などが副葬され、5号墳に比較して副葬品に格差をもつ6号墳のあり方からして、この支群が小共同体の首長（家族）と有力構成員（家族）によって形成されたことを具体的に示していると考えられるかもしれない。

（註）

1. 松本豊胤はか『母神山古墳群千尋支群第1・4・5・6号墳発掘調査概要』 1973。
2. 6世紀代の須恵器の年代観については渡部明夫「香川県における須恵器編年（1）－觀音寺市千尋支群・綾歌郡瀧山古墳群・今治古墳出土須恵器を中心として－」『香川史学』 6 1977による。
3. 近藤義郎はか『佐良山古墳群の研究』 1952。
4. 1973年に觀音寺市教育委員会・県教育委員会が調査。
5. 小田富士雄・寛野和夫はか『倉瀬戸古墳群』 1973。
6. 水野正好「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』 5 1970。

図 版



(1)



(2)

5号墳墳丘（南より）
5号墳石室（南西墓道より）



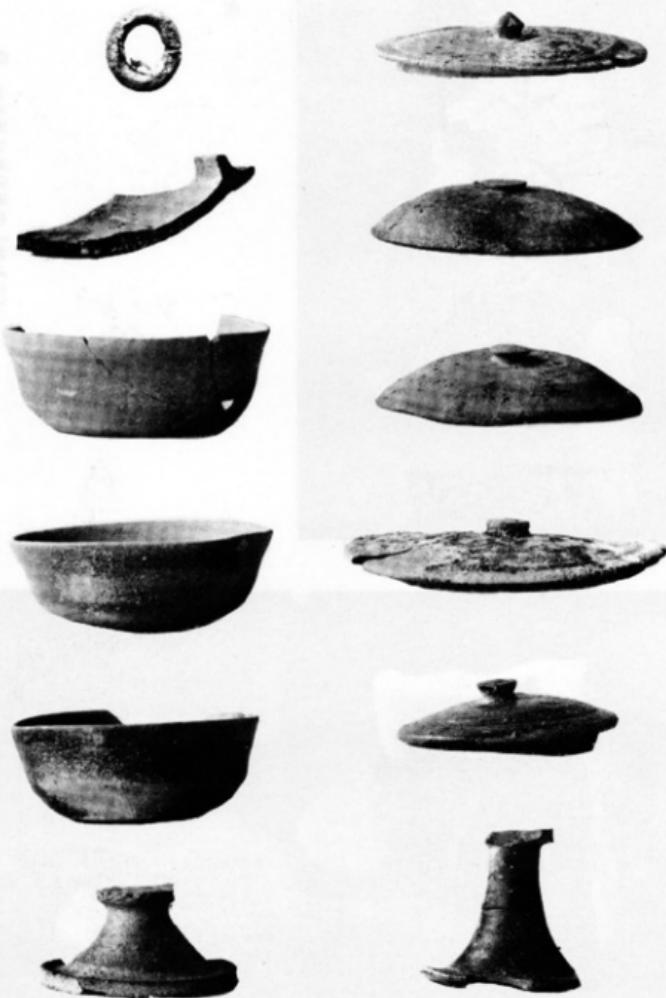
(1)

(2) (1)

5号墳石室（東より）
5号墳宝室盗掘坑（北より）



(2)



5号墳出土遺物 (1)



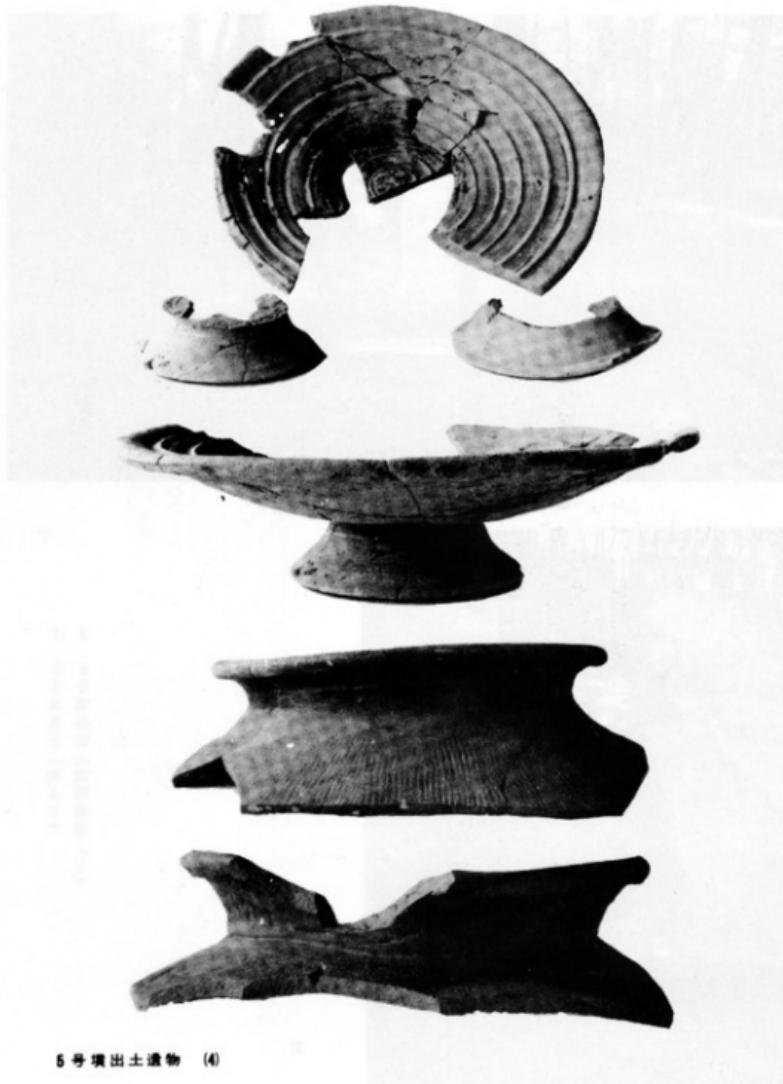
5号墳出土遺物 (2)

（出前文部省）



5号墳出土遺物 (3)

第二章 墳丘土器類



5号墳出土遺物 (4)

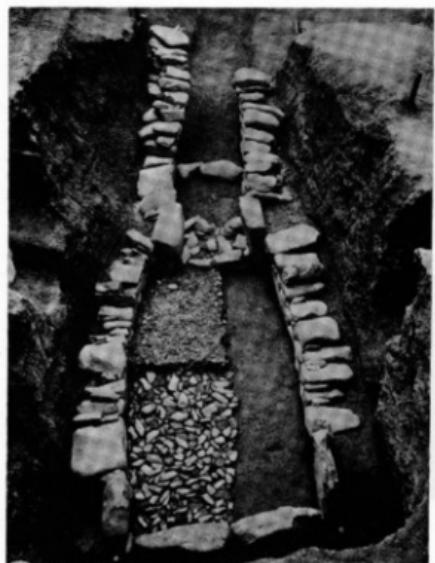


(1)

(2) (1)
6号墳墳丘（南より）
6号墳石室（南西墓道より）

(2)

第三回 石室と石棺



(1)

(2) (1)
6号墳石室（東より）
6号墳石室後部



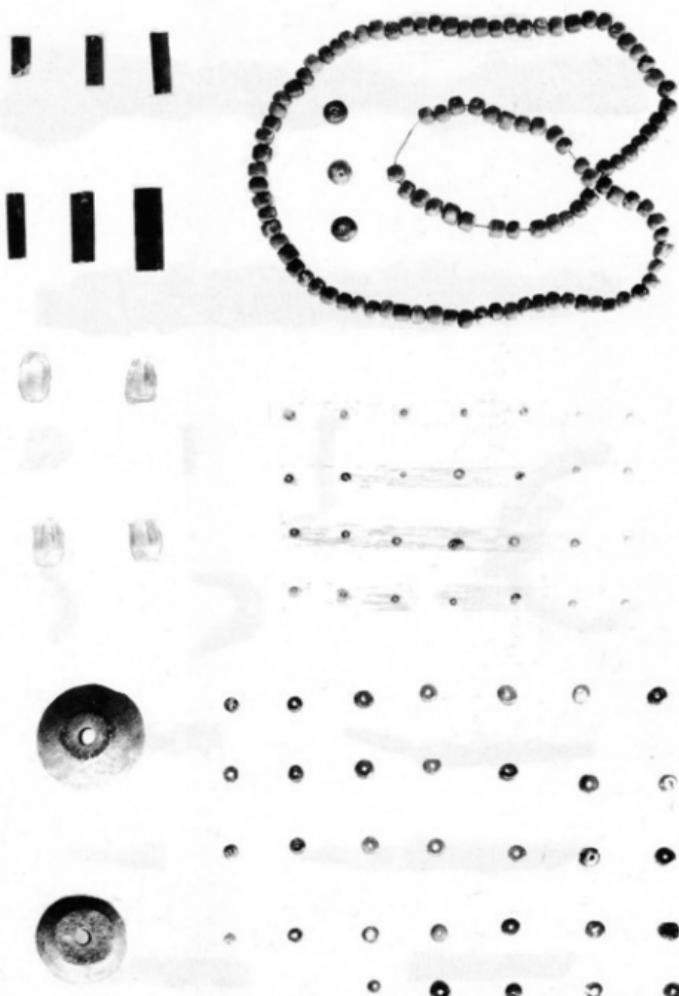
(2)



(1) 6号墳石室羨道部



(2) 6号墳石室玄門部



6号墳出土遺物 (1)



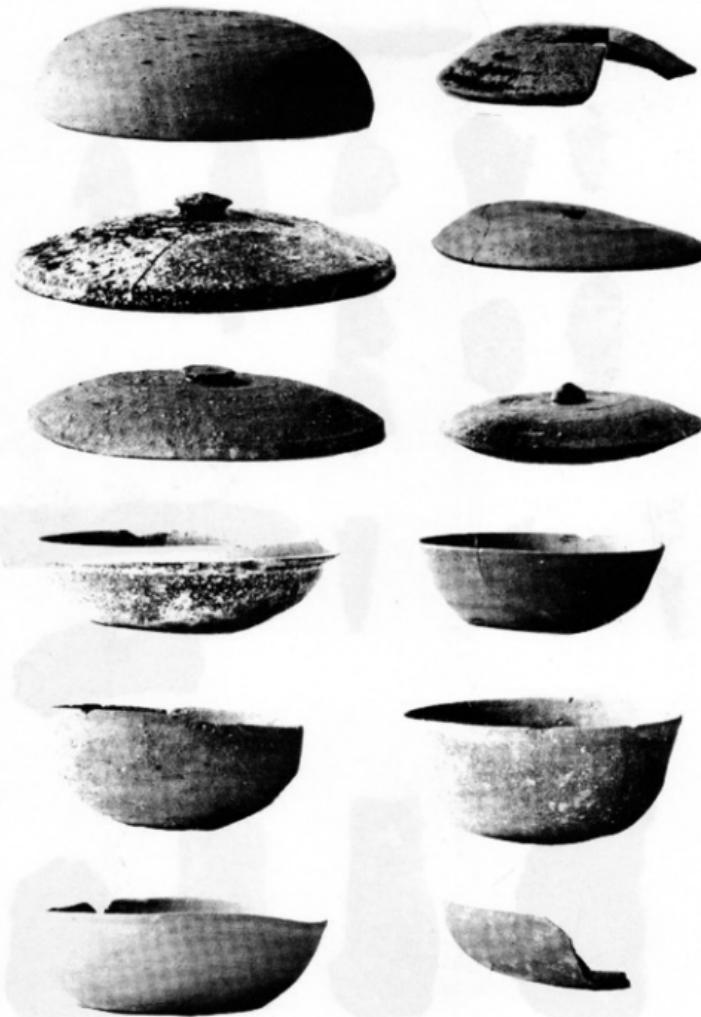
6号出土遗物 (2)

（见前文图版之二）



6号墳出土遺物 (3)

新石器時代遺物

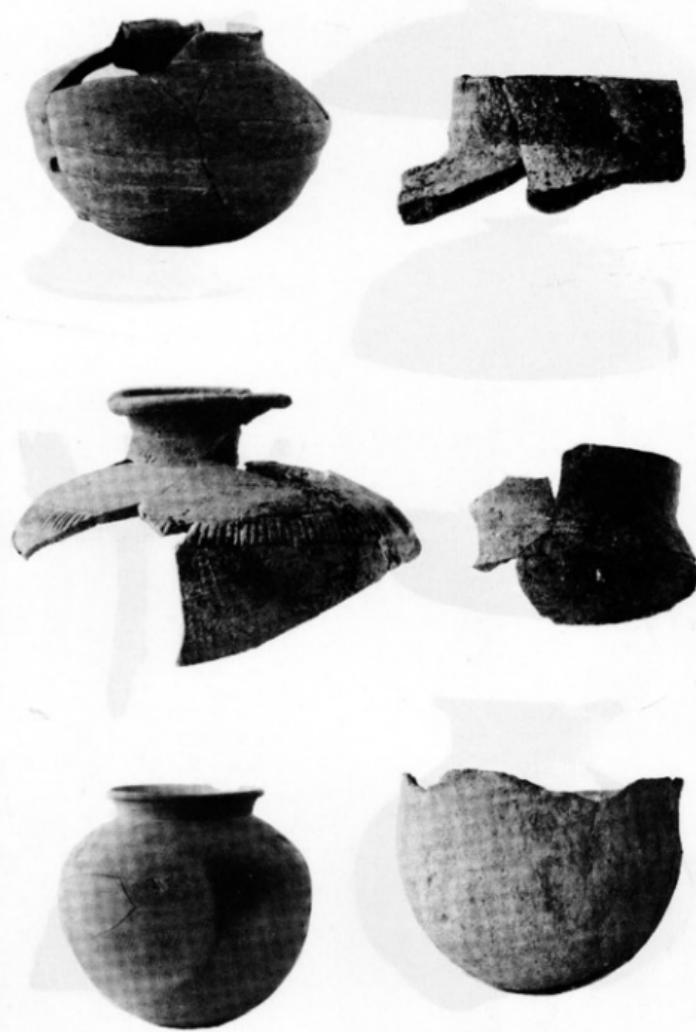


6号墳出土遺物 (4)



6号墳出土遺物 (5)

（出：昭和十九年春）



6号墓出土遗物 (6)

第一师范古迹研究室